

『タズキラ・イ・ホージャガン』 日本語訳注 (1)

澤 田 稔

富山大学人文学部紀要第 61 号抜刷

2014年8月

『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注 (1)

澤 田 稔

はじめに

ムハンマド・サーディク・カシュガリー (Muḥammad Šādiq Kāšqarī) なる人物が18世紀の後半にチャガタイ語 (トルコ系文語) で著した『タズキラ・イ・ホージャガーン (ホージャたちの伝記)』 (*Tazkira-i ḥwājagān*) は、16世紀後半のモグール・ハーン国 (ヤルカンド・ハーン国) の統治期から18世紀半ばにおけるジュンガル王国属領期の終焉にいたるまでの中央アジア東部 (東トルキスタン, 新疆南部) に関する貴重な史料である。この著作は、ヤルカンド, カシュガルを本拠地としてイスラーム神秘主義の指導者として活躍した所謂カシュガル・ホージャ家なる宗教指導者たちの伝記という体裁をとりつつ、彼らに関わった政治事象の推移にも触れている。

『タズキラ・イ・ホージャガーン』は、別の書名『タズキラ・イ・アズイーザーン』等で知られるものを含めて、イギリス, フランス, ドイツ, スウェーデン, ロシア, ウズベキスタン, 中国の図書館・研究所等の公的機関に20以上 (筆者未見も含む) の写本が蔵せられている¹⁾。筆者は作業仮説としてそれらの写本を書名, 記述の構成, 内容等からAグループ (長編である『タズキラ・イ・アズイーザーン』系統), Bグループ (短編である『タズキラ・イ・ホージャガーン』系統), Cグループ (おそらくAグループ系統の縮小版) の3つに分類している²⁾。

本稿は以下の写本を使用してBグループ写本の記述内容を日本語訳する。

・底本

D126写本: Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiiskoi Akademii nauk, D126

・対照するBグループの写本

ms. 3357写本: Institut de France, ms. 3357³⁾

-
- 1) Sawada Minoru, “Three Groups of *Tadhkira-i khwājagān*: Viewed from the Chapter on Khwāja Āfāq,” James A. Millward, Shinmen Yasushi, Sugawara Jun (eds.), *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20 th Centuries*, Tokyo: The Toyo Bunko, 2010, pp. 10, 19-20, List 1.
 - 2) *Ibid.*, pp. 10-11. 澤田稔 「『タズキラ・イ・ホージャガーン』の諸写本にみえる相違——書名と系譜について——」『西南アジア研究』第76号, 2012年, 72-73頁。
 - 3) 但し, ms. 3357写本は fol. 51a から長編であるAグループ写本 (あるいはCグループ写本) の内容に移行する。

Or. 5338 写本：British Library, Or. 5338

Or. 9660 写本：British Library, Or. 9660

Or. 9662 写本：British Library, Or. 9662

・参照する A グループ写本

Turk d. 20 写本：Bodleian Library, Turk. d.20

D191 写本：Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiiskoi Akademii nauk, D191

底本に設定したD126写本について触れておきたい。本書の諸写本の文献学研究として優れているのは、サンクトペテルブルグの東洋学研究所（現・東洋写本研究所）所蔵写本目録における解題である。同研究所の所蔵写本のなかでD126写本は他の写本を対照する際に「短縮版」の基準となる扱いをされている⁴⁾。D126写本は書写人ムハンマド・アミン（Muhammad Amīn）が作成した1235（西暦1819-20）年の写本を、さらにサンクトペテルブルグ大学東洋学部教員Mulla Khusain Feizkhanovがヨーロッパ紙にナスタリーク体で書写したものである⁵⁾。また、当写本にはアラビア文字によるページ番号（全219ページ）が付けられているが、さらに近現代の研究者の手によるものと思しき算用数字による葉番号（全110葉）も補筆されている⁶⁾。最後に、イスラーム期中央アジア史研究の大家バルトリド氏がD126写本（旧番号：590 00 bis）を利用していることも指摘しておきたい⁷⁾。なお、サンクトペテルブルグの東洋学研究所所蔵の上記諸写本のマイクロフィルムは（公益財団法人）東洋文庫に蔵せられている。

本号で日本語訳をおこなう範囲は、D126写本の冒頭からp. 28 / fol. 14bの7行目までである。神への賛辞から始まる序文では、著者ムハンマド・サーディク・カシュガリーが本書を著した経緯がその後援者の称揚とともに述べられる。序文の後には、ホージャたちの代々の血統（外

4) A. M. Muginov, *Opisanie uigurskikh rukopisei Instituta narodov Azii*, Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury, 1962, pp. 74-76; L. V. Dmitrieva, S. N. Muratov, *Opisanie tyurkskikh rukopisei Instituta vostokovedeniya*, Vypusk 2, Moskva: Nauka, 1975, pp. 60-66. なお、これらの写本目録の解説は『タズキラ・イ・アズイーザーン』を「最初の版」とし、『タズキラ・イ・ホージャガーン』はその「二番目の短縮された版」「短縮された異本」であると断じている（Dmitrieva, Muratov, *ibid.*, p. 53; Muginov, *ibid.*, p. 75）。筆者はこのふたつの書名の写本の関係についてまだ検討の余地が多く残されていると思う。そして、何よりもまず両者の記述内容を詳細に比較する必要があると考えている。

5) D126 写本（p. 219 / fol. 110a）の奥付と欄外の書き込みに基づく Muginov, *op. cit.*, p. 75; Dmitrieva, Muratov, *op. cit.*, p. 65 の見解である。さらに、同写本目録の解題に「コレクション：Feizkhanov, 1866 年」と記されており、1866 年もしくはそれ以前に Mulla Khusain Feizkhanov により書写されたものと考えられる。なお、書写の筆致は丁寧であり、文字の判読が容易である。

6) 先行研究における本写本の引用の仕方を考慮して、本稿の日本語訳においては【p. 7 / fol. 4a】の形でページ数と葉数（a は表、b は裏）の両方を示す。

7) V. V. Bartol'd, "Otchet o komandirovke v Turkestan," *Sochineniya*, Tom 8, Moskva: Nauka, 1973, pp. 176, 177, 183, 185-188; V. V. Bartol'd, "Retsenziya na knigi: Taarikh-i Emenie. Istoriya vladetelei Kashgarii (1905)," *Sochineniya*, Tom 8, p. 217.

形的系譜)が預言者ムハンマドから示される。「物語の章」の見出しで区切られた本文は、中央アジアのナクシュバンディー教団の指導者マフドゥーミ・アーザムの子でカシュガル・ホージャ家イスハーク派の始祖となるホージャ・イスハークの生涯の活動について詳しく語る。そして、その子ホージャ・シャーディーと二人の孫、ホージャ・イスハークの異母兄イーシャーニ・カラーンの子ホージャ・ユースフ、孫のホージャ・アーファークなどカシュガル・ホージャ家成員の活動を述べる。

日本語訳注

【p. 2 / fol. 1b】 慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において

測りきれない賛辞の宝石と称賛の真珠。絶対的であり崇拜される帝王様は、確かに高位の宮殿〔からの〕種々の神的な恩寵や諸々の果てしない顕現の光により、哀れな求愛者や誠実者、貧しい探究者の心の秘所を光輝させた。十万あるいは数え切れないような賛辞は、最も寛大で最も慈悲深き御方〔への〕献身である。その御方は導く力のある者たちや物語る力のある者たちを誤謬の暗闇から救い出し、かれらの胸の宝庫をイスラーム信仰の輝きにより磨き飾った。〈神がイスラームのために胸を広げたもうた者、すなわち、主のみ光の上を歩む者〉〔『クルアーン』 39-22〕⁸⁾ という命令により、知識人や賢者である探究者たちに段位と階梯を授与し、ほかの人びとより優位に立たせた。信心深い霊知者や測りきれないほどの秘奥の顕現者たちを威厳あらしめて卓越させ、最高の段位における位階を与え、〈すでに、我々はアダムの子を貴び〉〔『クルアーン』 17-70〕という勅命の書をかれらの頭において榮譽の冠【p. 3 / fol. 2a】とした。その完全なる知恵により、九つの天球をトパーズ色の大空から互いに入り組んで、柱なしで吊して回転させるのは、かれの成熟した能力なのである。四つの異なる要素を互いに一致させて人間の姿形を造ることは、かれの包括的な能力なのである。

祝福という多くの贈り物、数えきれない敬虔な祝福の頌詞は、万物のご主人様、存在物の精髓、すなわちムハンマド・ムスタファー猊下〈神が彼に祝福と平安を与えますように〉の神聖な庭園への奉納物、芳しい墓廟への施しであり、その預言者性の太陽は信仰の閃光から誤謬の暗闇を正導の光により消滅させた。〔ムハンマド・ムスタファー猊下は〕預言者たち一派に対し先導者、清浄なる者たち（聖者たち）の集団に対し先達であると言うことができる。創造の帳面

8) 『クルアーン』（『コーラン』）の訳文は藤本勝次・伴康成・池田修（訳）『コーラン』中央公論社、1970年、井筒俊彦（訳）『コーラン（上、中、下）』岩波書店、1964年、三田了一（訳注）『日亜対訳・注解 聖クルアーン』日訳クルアーン刊行会、1972年を参照した。

に花押の標題が、そして預言者性の系譜に栄誉ある目録と信頼できる印章が知るべき位置を有している。〈私は預言者であった。そしてアダムは水と泥のあいだにあった〉⁹⁾〔という文章は〕この意義が真実であることの証明、証拠¹⁰⁾である。〈私はアダムの子孫の主人である〉¹¹⁾〔という文章は〕かれの完全な優越性に流れ込んでいる¹²⁾。〈汝がいなければ、われは諸天を創らなかつた〉¹³⁾。〈われらが汝を遣わしたのは万民への慈悲のゆえにほかならない〉〔『クルアーン』21-107〕。その占有は高貴な存在〔や〕慈悲の存在の全般と包含に対して確定されており、明白な立証〔である〕¹⁴⁾。

そして、百、千の祝福と天恵の贈り物は〔ムハンマド・ムスタファー睨下の〕光栄ある子孫や偉大な妻たちへの施し¹⁵⁾、壮麗な教友たちと尊敬すべき後継世代の糧となろう。つまり、かれらはそれぞれ遠地点の星の長に選ばれし者たちである。〈わが教友たちは、【p. 4 / fol. 2b】そなたたちが正しく導かれる諸星のようである〉¹⁶⁾〔という文章は〕かれらの事なのである。それから、幸福なのは、かれらへの追従を選択して自身を誤謬の罰から乗り越えさせ、天国に入っている人である。不運で不幸であるのは、教友、指導者に反対し、ゆがんだ信念で変転して過ちを犯している人である。〈我々は神にそれからの救いを求める〉。

さて、世界の賢明で完全なる者たちの真つすぐな心に、小生ムハンマド・サーディク・カ

9) 同じ文章が *Aṣḥābu 'l-kāhf, a Treatise in Eastern Turki*, translated and edited by Emine Gürsoy-Naskali, Helsinki: Suomalais-ugrilainen Seura, 1985, pp. 12, 34, text 5 (3a) にある。

10) D126 写本と Or. 5338, fol. 2a では ŠAHYDVR と綴られているが, ms. 3357, fol. 3a; Or. 9660, fol. 1b の綴り (ŠAHD DVR) より šāhid dur と読む。なお, Or. 9662, fol. 3b では ŠAHYD DVR と綴られている。

11) 同じ文章が *Aṣḥābu 'l-kāhf, op. cit.*, pp. 12, 34, text 5 (3a) にある。

12) D126 写本と Or. 5338, fol. 2a では JARY DAR と綴られているが, Or. 9660, fol. 1b の綴り (JARY VARD) により, jāri wārid と読む。ms. 3357, fol. 3a では JARY, Or. 9662, fol. 3b では JARY VAR DVR と綴られている。

13) 同じ文章が川口琢司・長峰博之編、菅原睦校閲『『チンギズ・ナーマ』ウテミシュ・ハージー (Ötāmiš Hāji) 著、解題・訳註・転写・校訂テキスト』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2008年、3、65頁、text 36a および守川知子監訳、ペルシア語百科全書研究会訳注「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(1)』『イスラーム世界研究』第2巻2号、2009年、206頁にある。後者の注記によると、『クルアーン』にこの表現(文章)は見られないという。

14) この一文の意味する所を解し得ない。

15) D126 写本では NŠAY と綴られているが, ms. 3357, fol. 3a; Or. 9660, fol. 1b; Or. 9662, fol. 3b の綴り (NŠARY) により nišāri と読む。Or. 5338, fol. 2b では NŠAMY と綴られている。

16) ほぼ同じ文章が *Aṣḥābu 'l-kāhf, op. cit.*, pp. 12, 34, text 5 (3b) にあり、テキスト本文において「預言者の伝承」(ḥadīṣ-i nabawī) と明示されている。

シュガリー (Muḥammad Šādiq Kāšqarī) は〔次のように申し上げる〕¹⁷⁾。すなわち、アミールたちのアミール¹⁸⁾、貧者たちのパトロン、高貴な家系、崇高な血統、重き尊厳、気高き存在、カシュガルの榮譽ある王座における専制的なハーキム、すなわち、ウスマーン・ベグ (‘Uṣmān Beg)¹⁹⁾ <神が彼の幸運を永遠なものにしますように>は、王権の天空の光輝く太陽、カリフ権の王冠の煌めくルビー、〔時代の希なる者〕、ヤルカンド城市〔の厳命者たるアミール〕²⁰⁾、専制的なハーキム、崇高なる出自、〔すなわち〕ミールザー・ハディー・ベグリク閣下 (Ḥaḍrat-i Mīrzā Hadī Beglik) の最愛の子息であり、カシュガルの王権の座において確乎としていた²¹⁾。このアミールの高貴な歩調のおかげで、カシュガルは、压制者〔さえも〕が、臣民たちの財物を強圧によって取っていた盗人や不正な者たちを懲らしめ、監視して訓戒するというほど繁栄に達した。賢い知識者たちを無知な压制者たちより優先し、公平な公正者たちを不正な压制者たちより卓越せしめ、それぞれの者たちを各自の地位に配置していた。〔そして、数世紀以来残っていた不法な逸脱をこなごなにくだき、権利の所有者たちの手に権利を正当に達せしめた。そして、全ての人々は自らの中心において確乎となった。いかなる命令も聖法 (シャリーア) なしに布かれなかった。まさにこの理由から全ての人々は、このアミールに対して良き祈りをなし〕²²⁾、【p. 5 / fol. 3a】その行状、特質を説明している。

おお神よ、時代の間のかれの生命を永遠にせよ

そしてまた、その壮麗、威信を百倍も高くして

榮譽の頂点の不死鳥の頭の上に日よけをつくれ

ヌーシールワーン²³⁾ の如く頭の上で王冠の公正をするように

17) D126 写本と Or. 5338, fol. 2b では「次のように申し上げる」(‘arḍ yetkūrā dur ki) の語句が欠けているので、他の写本 (ms. 3357, fol. 3b; Or. 9660, fol. 2a; Or. 9662, fol. 4a) により補足する。

18) D126 写本では「アミールたちのアミール」(amīr al-‘umarā’) のうち amīr の語が欠けているので、他の写本 (ms. 3357, fol. 3b; Or. 5338, fol. 2b; Or. 9660, fol. 2a; Or. 9662, fol. 4a) により補足する。

19) ms. 3357, fol. 3b; Or. 5338, fol. 2b; Or. 9662, fol. 4a では「ウスマーン・ベグリク」(‘Uṣmān Beglik), Or. 9660, fol. 2a では「ウスマーン・ベグリク閣下」(Ḥaḍrat-i ‘Uṣmān Beglik) となっている。

20) D126 写本と Or. 5338, fol. 2b では「時代の希なる者、ヤルカンド城市の厳命者たるアミール」(nādir al-zamān amīr-i nāfiz al-ḥukm-i šahr-i Yārkand) のうち nādir al-zamān amīr-i nāfiz al-ḥukm-i が欠けているので、他の写本 (ms. 3357, fol. 3b-4a; Or. 9662, fol. 4b) により補足する。

21) ウスマーンがカシュガルのハーキム・ベグ職の任にあったのは、アクスのハーキム・ベグ職より転任した 1778 年からその歿年の 1788 年までである (澤田稔『『タズキラ・イ・ホージャガーン』研究についての覚書』『帝塚山学院短期大学研究年報』第 39 号, 1991 年, 11-12 頁)。

22) 〔そして、数世紀以来残っていた不法な逸脱をこなごなにくだき、・・・このアミールに対して良き祈りをなし〕の数行の文章は D126 写本に欠けているので、他の写本 (ms. 3357, fol. 4a-b; Cf. Or. 9660, fol. 2a-b; Or. 9662, fol. 4b-5a) により補足する。

23) サーサーン朝の王ホスロー 1 世 (在位 531-579 年) のこと。理想の名君とされている。

勝利が多く²⁴⁾ 災難を与えるやいなや、敵のほうに散らばり
どれほど難しい事になっても、まさにその瞬間、容易にせよ
その気分を新鮮に、その性質を良く、その言葉を説明せよ
イーラーンは再び地上の従順な従者となるだろう
それを頼りにして臣民のうちに多くの平穏安寧があった
多くの²⁵⁾ 好意と愛顧をなすやいなや、世界は繁栄した
圧制や不正の土台をなおした民は四方へ逃げ
さすらいの悪名高き者たちは無の荒野で驚いた
その願いはかなえられ、その命令は執行され、その生涯は成功する
おお、慈悲深きお方よ、サーディク（誠実な者）と言え。応諾せよ

さて、この公正なるアミールの優しい母上がいた。すなわち誠実高潔の庭園の咲き誇るバラ、同情あわれみの集会の希有の主席、アーイシャ²⁶⁾ [のような]大志、マルヤム²⁷⁾ [のような]忠実、すなわち、ラヒーマ・アガチャリク (Raḥīma Aḡačaliq) は時代の敬虔な者であり、純潔であった。国のなかで〔彼女は〕知識人や賢者たちの一派、つまり孤独や虚弱の片隅において【p. 6 / fol. 3b】長のない (bī-sar) ままであった人類や善良な者の子孫をととてもよく慰め、同情して憐れんでいた。この完全の所有者たるアミールも、この母の地位身分を認め、尊敬の念を表していた。

この方たちの先祖はホージャ・イスハーク・ワリー猊下 (Ḥaḍrat-i Ḥvāja Ishāq Walī)²⁸⁾ の子孫に改悛し献身してきたらしい。靈知者たちの枢軸、預言者たちの相続人、すなわちホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下 (Ḥaḍrat-i Ḥvāja Jahān Ḥōjam)²⁹⁾ をはじめとするアズィーズ（尊師）たちが過ぎさっている。特に、ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下 (Ḥaḍrat-i Yūsuf

24) D126 写本では HLY であるが、Or. 5338, fol. 3a; Or. 9662, fol. 5a の ḤYLY により ḥaylī (多くの) と読む。

25) 他の写本 (ms. 3357, fol. 4b; Or. 5338, fol. 3a; Or. 9660, fol. 2b; Or. 9662, fol. 5a) により kōp (多くの) を補足する。

26) 初代正統カリフ、アブー・バクルの娘で預言者ムハンマドの妻の名前。

27) イーサー（イエス）の母の名前（マリア）。

28) ナクシュバンディー教団の指導者マフドゥーミ・アーザムの子で、所謂カシュガル・ホージャ家イスハキヤの名祖（1599年没）。詳しくは、澤田稔「ホージャ・イスハークの宗教活動——特にカーシュガル・ハーン家との関係について——」『西南アジア研究』第27号、1987年、57-74頁、濱田正美「ホージャ・イスハーク・ワリー」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店、2002年、891-892頁を参照のこと。

29) 本書で後述されるように、ホージャ・ジャハーン・ホージャムはホージャ・イスハーク・ワリーの4代目の子孫である。

Hōjam Pādišāh)³⁰⁾ は、このアズィーズたちに起きた驚くべき事態や見知らぬ困難さを語り想起していた。いつも次のように言っていた。すなわち、誰かある者がこのアズィーズたちの特性を描写して彼らに生じた出来事を書く大志をもつならば、と述べていた。小生の悩み多き心にも、このアズィーズたちの出来事を一つの伝記にすればという思いがよぎっていた。〔しかし小生〕自身では容易ではなかった。結局、〔ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下は〕小生に恩恵を開始し、次のように話しかけた。すなわち、「そなたがこの仕事を成し遂げるならば、世界の表面に一つの記念物が残り、われらとそなたの名前とともに記念物が必ず残るであろう」と命じた。

この貧しき愚生は仕方なく神託を求め、良きお告げを得て、アズィーザーン（尊師たち）・ホージャガーン（ホージャたち）の諸靈魂に助けを求めて〔著述することに〕踏み込んだ。そしてまた、〔p. 7 / fol. 4a〕この『タズキラ・イ・ホージャガーン（ホージャたちの伝記）』（*Tazkira-i hōjagān*）のなかに誤謬があったならば、赦しのペンナイフを寛容の手に取って誤りの面を削除し、＜神は善行者の報酬を無にしたもうことはない＞〔『クルアーン』9-120〕〔という気高き証明に〔誤謬を正した者たちが〕入ることを願う。もし至高の神が望まれるならば。＜神は、偉大なみ恵みの所有者であらせられる＞〔『クルアーン』57-29〕〕³¹⁾。

さて、本書『タズキラ・アルジャハーン』（*Tazkirat al-Jahān*）³²⁾ が著されたのは暦年に千百八十二であったということが、隠されませんように³³⁾。神は最も正しく知りたもう。

さて、系譜には二つの種類、精神的系譜、外形的系譜³⁴⁾があるということを知れ。外形的系譜とは、誰その息子は誰それと関係づけられる系譜を言うのである。精神的系譜（*nisbat-i*

30) ホージャ・ジャハーン・ホージャムの弟。

31) 〔という気高き証明に・・・所有者であらせられる＞〔『クルアーン』57-29〕〕の文章は D126 写本に欠けているので、他の写本（ms. 3357, fol. 6b; Or. 9662, fol. 6b）により補足する。

32) D126 写本では TZKRHT ALHAN, Or. 5338, fol. 3b では TZKYRHT ALHMAN と綴られているが、ms. 3357, fol. 6b では TZKYRH ALJHAN, Or. 9662, fol. 6b では TZKZH JHAN, Or. 9660, fol. 3b では TZKRH ALJHAN と綴られている。

33) 本書の書名が『タズキラ・アルジャハーン』であるのか、それとも直前の段落で言及されている『タズキラ・イ・ホージャガーン（ホージャたちの伝記）』であるのか、即断できない。さらに、著者がこの序文で賛辞を捧げているカシュガルのハーキム、ウスマーン・ベグがそのハーキム職に着任したのは1778年であるから、本書の著作年はここで記されたイスラーム暦1182（西暦1768-69）年ではあり得ず、1778年以後のこととなる。詳しくは、前掲の澤田稔『『タズキラ・イ・ホージャガーン』の諸写本にみえる相違——書名と系譜について——』74-79頁を参照のこと。

34) D126 写本と Or. 5338, fol. 3b-4a では訳文のように「精神的系譜、外形的系譜」（*nisbat-i ma'nī, nisbat-i šūrī*）であるが、他の写本（ms. 3357, fol. 6b; Or. 9660, fol. 3b; Or. 9662, fol. 6b）では「外形的系譜、精神的系譜」（*nisbat-i šūrī, nisbat-i ma'nawī*）と順序が逆になっている。

ma'nawī) [については], 使徒猓下<神がかれに祝福と平安をあたえますように>の行為を用いることが許されるならば, この系譜はまた三つの種類になる。第一の種類³⁵⁾ は外面的知識, 第二は外面的行為, 第三は内面的行為。内面的行為に到らない限り, 外面的知識³⁶⁾ からいかなる割り当てもなされない。使徒猓下<かれの上に平安がありますように>の知識は二種類である。その一つは預言に依存する知識である。それを聖法の知識と名づく。もう一つは聖性に依存する知識である。それを心的状態 (hāl) の知識, 内面的知識³⁷⁾ と名づく。

まず, 外形的系譜を説明しよう。ムハンマド・ムスタファー猓下<神が彼に祝福と平安をあたえますように>の子ファーティマ・ザフラー猓下, その方³⁸⁾ の子イマーム・フサイン猓下³⁹⁾, その方の子イマーム・ザイン・アルアビディーン猓下, その方の子イマーム・ムハンマド・バーキル猓下, その方の子イマーム・ジャーファル・サーディク猓下, その方の子 [p. 8 / fol. 4b] [イマーム・] ムーサー・カーズィム猓下⁴⁰⁾, その方の子イマーム・アリー・ムーサー・[リザー]猓下⁴¹⁾, その方の子サイド・ターリブ猓下 (Ḥaḍrat-i Sayyid Ṭālib), その方の子アブド・アッラー・アーラジュ ('Abd Allāh A'raj) [猓下]⁴²⁾, その方の子アブド・アッラー・アフザル猓下 (Ḥaḍrat-i 'Abd Allāh Afḍal), その方の子ウバイド・アッラー猓下, その方の子サイド・アフマド [猓下]⁴³⁾, その方の子サイド・ムハンマド猓下, その方の子シャー・フサイン猓下, その方の子シャー・ハサン猓下, その方の子サイド・ジャラル・アッディーン猓下, その方の子サイド・カマル・アッディーン猓下, その方の子サイド・ブルハー

35) D126 写本では NŞFY と綴られているが, ms. 3357, fol. 6b の ŞNFY, Or. 9660, fol. 3b; Or. 9662, fol. 7a の ŞNF により şinf (種類) と読む。

36) D126 写本と Or. 5338, fol. 4a では訳文のように「外面的知識」(zāhir 'ilm), ms. 3357, fol. 6b; Or. 9660, fol. 3b; Or. 9662, fol. 7a では「外面的行為」(zāhir 'amal) となっている。

37) D126 写本と Or. 5338, fol. 4a では 'LM ḤAL BAṬN, ms. 3357, fol. 7a; Or. 9660, fol. 3b では 'LM ḤAL 'LM BAṬNY, Or. 9662, fol. 7a では 'LM ḤAL 'LM BAṬYN となっている。ilm-i ḥāl 'ilm-i bāṭinī / bāṭin と読む。

38) A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 41b; D191, fol. 48b) ではアリーとファーティマの両名が記されている。

39) D126 写本では ḤASN と綴るが誤記であり, ms. 3357, fol. 7a; Or. 5338, fol. 4a; Or. 9662, fol. 7a により Ḥusayn と読む。なお, Or. 9660, fol. 3b ではファーティマ・ザフラーの子としてイマーム・ハサンとイマーム・フサインの両名が記されている。

40) D126 写本では「イマーム」の称号を付さずに「ムーサー・カーズィム猓下」とするが, 単純なミスと思われるので, Or. 5338, fol. 4a; ms. 3357, fol. 7a; Or. 9660, fol. 4a; Or. 9662, fol. 7a により補足する。

41) リザー (Riḍā) は Or. 9660, fol. 4a; Or. 9662, fol. 7a による補足である。

42) D126 写本と Or. 5338, fol. 4a では, この人物に対して Ḥaḍrat が付されていないが, ms. 3357, fol. 7a; Or. 9660, fol. 4a; Or. 9662, fol. 7a により補足する。

43) D126 写本と Or. 5338, fol. 4a では, この人物に対して Ḥaḍrat が付されていないが, ms. 3357, fol. 7b; Or. 9660, fol. 4a; Or. 9662, fol. 7b により補足する。

ン・アッディーン・クルチュ睨下 (Ḥaḍrat-i Sayyid Burhān al-Dīn Qilīch), その方の子〔サイイド・〕ホージャ睨下⁴⁴⁾, その方の子はまたサイイド・ブルハーン・アッディーン睨下, その方の子サイイド・ジャラルール・アッディーン睨下⁴⁵⁾, その方の子マフドゥーミ・アーザム睨下 (Ḥaḍrat-i Makhdūm-i A‘ẓam), その方の子ホージャ・イスハーク・ワリー睨下, その方の子ホージャ・シャーディー (Ḥōja Shādī) [睨下]⁴⁶⁾, その方の子ホージャ・アブド・アッラー睨下, その方の子ホージャ・ダーニヤール睨下, その方の子〔ホージャ・〕ヤークーブ睨下 (Ḥaḍrat-i Ya‘qūb)⁴⁷⁾, その方の尊称(ラカブ)はホージャ・ジャハーン[睨下]⁴⁸⁾であった。ホージャ・ジャハーンと言うことにおいて老師たちは、「このホージャは世界征服者(ジャハーンギール)となる。この者をホージャ・ジャハーンと呼べ」と命じていた。まさにその理由によりホージャ・ジャハーンと名付けられた。神はよりよく知りたもう⁴⁹⁾。

44) D126 写本では「ホージャ睨下」(Ḥaḍrat-i Ḥōja) とのみ記され、欄外に別の筆跡で SYD (Sayyid) が補われている。ms. 3357, fol. 7b; Or. 9660, fol. 4a は「サイイド・ホージャ睨下」(Ḥaḍrat-i Sayyid Ḥōja), Or. 9662, fol. 7b は「アフマド・ディヴァーナ睨下」(Ḥaḍrat-i Aḥmad Dīvāna) とする。

45) D126 写本; ms. 3357, fol. 7b; Or. 9660, fol. 4a では「サイイド・ジャラルール・アッディーン睨下」と「その方の子マフドゥーミ・アーザム」の間に「その方の子サイイド・ホージャ・アフマド睨下」が入っているが、Or. 5338, fol. 4b; Or. 9662, fol. 7b では入っていない。アフマドはマフドゥーミ・アーザムの本名であるので、後者が正しい。なお、本書以外の聖者伝資料に記された系譜については、Sawada Minoru, “The Genealogy of Makhdūm-i A‘ẓam and Cultural Traditions of Mazārs”, Sugawara Jun (ed.), *Studies on the Islamic Sacred Sites in Central Eurasia* (Forthcoming) を参照のこと。

46) D126 写本と Or. 5338, fol. 4a では、この人物に対して Ḥaḍrat が付されていないが、ms. 3357, fol. 7b; Or. 9660, fol. 4a; Or. 9662, fol. 7b により補足する。

47) D126 写本はこの人物を「ヤークーブ睨下」と記すが、ms. 3357, fol. 8a; Or. 9660, fol. 4a; Or. 9662, fol. 7b により「ホージャ」を補足する。

48) D126 写本では Ḥaḍrat が付されていないが、ms. 3357, fol. 8a; Or. 9662, fol. 7b により補足する。

49) Or. 9662, fol. 7a-b の外形的系譜では「～の子」という親子関係が示されておらず、次のように序数で系譜の受け継ぎを示してしている。「ムハンマド・ムスタファー睨下<神が彼に祝福と平安をあたえますように>、初代。ファーティマ・ザフラー睨下、2代。イマーム・フサイン睨下、3代。〔中略〕マフドゥーミ・アーザム睨下、24代。ホージャ・イスハーク・ワリー睨下、25代。ホージャ・シャーディー睨下、26代〔後略〕。また、そのなかには、D126 写本や ms. 3357 写本と異なる名前も見られる。

【p. 9 / fol. 5a】物語の章 (faṣl-i dāstān)。聞かなければならない。

マフドゥーミ・アーザム・パーディシャー殿下⁵⁰⁾には、四人の夫人 (ḥaram) がいた⁵¹⁾。この方の第一夫人はカーサーン (Kāsān)⁵²⁾のサイイドの出のサイイド・ミール・ユースフの娘であり、トゥグマイ・アーンハズラト (Tūgmāy Ān- Ḥaḍrat)⁵³⁾であった。この方 (第一夫人) から四人の息子、一人の娘があった⁵⁴⁾。その最初の息子はイーシャーニ・カラーン (Īsān-i

50) マフドゥーミ・アーザム (「偉大な導師」) の尊称で広く知られるアフマド (1461/62-1542/43 年または 1464-1542 年) はフェルガナ盆地のカーサーンのサイイドの家系の生まれで、ナクシュバンディー教団の著名な指導者である。詳しくは、J. Fletcher, “Aḥmad K̄ājagī b. Jālāl-al-dīn Kāsānī,” *Encyclopaedia Iranica*, Vol. 1, Fascicle 6, London, Boston, Melbourne and Henley: Routledge & Kegan Paul, p. 649; B. M. Babadzhanov, “Makhdum-i A‘zam,” *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slobar’*, Vypusk 1, Moskva: Izdatel’skaya filma «Vostochnaya literatura» RAN, 1998, pp. 69-70; 濱田正美「マフドゥーミ・アーザム」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』東京: 岩波書店, 2002 年, 926 頁, 濱田正美「マフドゥーミ・アーザム」小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る辞典』東京: 平凡社, 2005 年, 485 頁を参照のこと。

51) マフドゥーミ・アーザムの四人の夫人と子女について、彼の伝記 *Jāmi‘ al-maqaṁāt* (ペルシア語) をチャガタイ・トルコ語に翻訳して作成された (1819 年 12 月 8 日完成) 作品 *Majmū‘at al-muḥaqqiqīn* (Staatsbibliothek zu Berlin, Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, Ms. or. oct. 1680, pp. 32-33; Staatsbibliothek zu Berlin, Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, Ms. or. oct. 1719, pp. 213-215; British Library, India Office Library, Ms. Turki 7, fol. 14b-15a) に記述がある (ただし, Ms. or. oct. 1719 写本のマイクロフィルムは名前の部分が不鮮明である)。なお, ウズベキスタンのババジャーノフ氏の研究によると, 別の伝記 *Silsilat al-siddīqīn wa-anīs al-‘āshiqīn* にもマフドゥーミ・アーザムの妻子の名が記されている (B. Babajanov, “Biographies of Makhdūm-i A‘zam al-Kāsānī al-Dahbīdī, Shaykh of the Sixteenth-century Naqshbandīya,” *Manuscripta Orientalia. International Journal for Oriental Manuscript Research*, Vol. 5, No. 2, 1999, p. 5)。

52) D126 写本; ms. 3357, fol. 8a; Or. 5338, fol. 4b; Or. 9662, fol. 8a では KARSAN であるが, Or. 9660, fol. 4b では KASAN となっている。ショー氏は Kārsān と読み, Kārsān はブハラからカルスイーへの途上 10 ファルサフ程のところにある村と注記されている (Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Tazkira-i-Khwājagān of Muḥammad Ṣādiq Kashghari,” edited with introduction and notes by N. Elias, Supplement to the *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. 66, Part 1, 1897, p. 32, footnote 3)。しかしながら, この地名はカーサーンではなく, マフドゥーミ・アーザム (アフマド・カーサーニー) の故郷であるフェルガナ盆地北辺の町カーサーンであると考えるのが妥当であろう。

53) 人名であると思われる。Aytjan Nurmanova, *Qazaqstan Tarikhī Turalī Türkī Derektemeleri IV tom. Mūkhammed-Sadiq Qashghari, Tazkira-yi ‘azizan*, Almatī: Dayk-Press, 2006, p. 63 参照。ただし, A グループの写本 (D191) に拠ったヌールマノヴァ氏のカザフ語訳では「トゥグマイ」ではなく「タガイ」と表記されている。

54) *Majmū‘at al-muḥaqqiqīn* は、「この方の大夫人 (uluḡ ḥaram) は, この方のおじ (tagalari) ミール・サイイド・ユースフの娘であった。この夫人から四人の息子と二人の娘があった」と記し, 「トゥグマイ・アーンハズラト」という名前を挙げておらず, また, 娘の数も異なっている (Ms. or. oct. 1680, p. 32; Cf. Ms. Turki 7, fol. 14b)。

Kalān)⁵⁵⁾、二番目はホージャ・ドゥースト (Hōja Dūst)、三番目はホージャ・バハーウ・アッディーン (Hōja Bahāw al-Dīn)、四番目はホージャ・アブド・アルハーリク・ホージャム (Hōja ‘Abd al-Ḥālīq Hōjam)。ホージャ・ドゥーストはハリーフア (師範代) 達の長のひとりであった。ホージャ・バハーウ・アッディーンは偉大なる父から布教の地位 (maqām-i da‘wat) と教導の允許 (ruḥṣat-i irṣād) を得ていた。

もう一人の夫人はカーサーン⁵⁶⁾ 王の娘であり、マリーカ・カーサーニー (Malīka Kāsānī)⁵⁷⁾ と呼ばれていた。この方から二人の息子、二人の娘があった。その一人の名はホージャ・ムハンマド・ホージャム (Hōja Muḥammad Hōjam)、もう一人の名はスルターン・イブラーヒーム (Sulṭān Ibrāhīm)。

もう一人の夫人の名はビービーチャ・イ・カシュガリー (Bībīča-i Kāšqārī) と呼ばれていた。スルターン・サトゥク・ボグラ・ハーン・ガズイー (Sulṭān Satūq Boḡrā Ḥān Ġazī) の子孫であった⁵⁸⁾。気高き神のライオン、ホージャ・イスハーク・ワリー、この愛し子は、この夫人からであった⁵⁹⁾。母がホージャ・イスハーク・ワリー⁶⁰⁾ を身ごもっていた時、[母が] 家に入れば、マフドゥーミ・アーザム猯下は立ち上がり、へりくだっていた。そして、「へりくだっているのはあなたに対してではなく、子のためである。この子はホージャ猯下たち (Ḥaḍrat-i Hōjagān) のスィルスィラ (道統の系譜) をふるわせてホージャたちの道 (ṭarīq-i Hōjagān) を大きく普及させ、全世界は彼の神聖さの光により照らし輝かされる。[p. 10 / fol. 5b] この者の子孫から何人かの完全性の所有者 (ṣāhib-kamāl) が現れる」と言っていた。その後ホージャ・

55) *Majmū‘at al-muḥaqqiqīn* は、「その方の長男 (uluḡ oḡlanlarī) はホージャ・ムハンマド・エミーン (Ḥvāja Muḥammad Emīn)」と記し、本名を挙げている。

56) D126 写本 ; ms. 3357, fol. 8b; Or. 5338, fol. 4b; Or. 9660, fol. 4b; Or. 9662, fol. 8a では KARSAN, A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 14b; D191, fol. 17b) では KASAN である。*Majmū‘at al-muḥaqqiqīn* に「二番目の夫人ブービー (ビービー)・マリーカ・(イ)・カーサーニーはカーサーン王の娘のひとりであった」と記されている (Ms. or. oct. 1680, p. 32; Cf. Ms. Turki 7, fol. 14b)。カーサーンが正しい。

57) D126 写本 ; ms. 3357, fol. 8b; Or. 5338, fol. 4b; Or. 9660, fol. 4b では KARSANI, Or. 9662, fol. 8a では KARSAN, A グループの写本の Turk d. 20, fol. 14b では KASAN, D191, fol. 17b では KASANI である。カーサーニーが正しい。

58) *Majmū‘at al-muḥaqqiqīn* はビービーチャ・イ・カシュガリーがスルターン・サトゥク・ボグラ・ハーン・ガズイーの子孫であることを記していない。また、その Ms. or. oct. 1719 写本はビービーチャ・イ・カシュガリーではなく、「ブービー・ハディージャ・カシュガリー (Būbī Ḥadīja Kāšqārī)」と記す。

59) Shāh Maḥmūd Churās 著 *Anīs al-ṭālibīn* (Bodleian Library, Ms. Ind. Inst. Pers. 45, fol. 88a) によると、ホージャ・イスハークの母はカシュガルの出で、サイド・ズィヤウ・アッディーン (Sayyid Dīyāw al-Dīn) の子孫であった。この母の出自に関する記述の違いについては、濱田正美「サトク・ボグラ・ハーンの墓廟めぐって」『西南アジア研究』第34号、1991年、100-102頁を参照のこと。

60) D126 写本では「イスハーク・ホージャ・ワリー」と記すが、ms. 3357, fol. 8b; Or. 5338, fol. 5a; Or. 9660, fol. 4b; Or. 9662, fol. 8b により修正する。

イスハーク・ワリー猯下が誕生した。〔マフドゥーミ・アーザム猯下は〕その方の養育⁶¹⁾においてとても敬意を表していた。このビービーチャにも「お前は誤りのないよう、この子に対して用意周到であれ、清浄さをもって育てよ」と言って戒めていた。

語り伝えである (naqlī dur kim)⁶²⁾。秘奥のご親友、ホージャ・ムハンマド・カースィム (Hōja Muḥammad Qāsim) はマフドゥーミ・アーザム猯下の側近 (hāṣṣ) の一人であったが、次のように言っていた。ある日わたしは猯下のもとで坐していた。多数の一团もいた。ホージャ・イスハーク猯下は七歳であり、わたしは〔かれを〕肩に乗せてマスジド (礼拝所) の門へ連れて行っていた。〔ホージャ・イスハーク猯下は〕「天国用〔と〕地獄用の靴を別々にしようか」と言った。わたしは「おおホージャムよ、今は話す時ではない」と言った。わたしはこの出来事を内々にマフドゥーミ〔・アーザム〕⁶³⁾猯下に説明した。猯下は「この子に食品市場 (aṣ bāzāri)⁶⁴⁾ を与えよ」と命じた。

語り伝えである。ムハンマド・カースィムはまた次のように言っている。十歳のホージャ・イスハーク・ワリー猯下は、わたしの懐にいだかれていた。マフドゥーミ・アーザム猯下はホージャ・イスハーク・ワリーを見て、頭を下に振って、「おおムハンマド・カースィムよ、わたしの、この子から注意をおこたるな。ホージャたちのスィルスィラ (道統の系譜) は、【p. 11 / fol. 6a】この子の時に枝葉を出して世界的になるほどに完全性を得る。ほかの子においてもそうなるが、この子の時に十の割り当てになる」と言った。そしてまた〔マフドゥーミ・アーザム猯下は〕次のように言った。「夜、わたしは夢で次のように見ている。わたしは、ある高い山の頂にいた。この子も天の銀河のごとく、ある山頂にいる。東と西の方を見て叫んでいる。多数の一团が両方から返答している。この子の名声が東西に達していることが分かった」と言って、ホージャ・イスハーク・ワリーに口づけした。

語り伝えである。学識があり完全性を得た者、すなわち、アーホンド・ムッラー・サーイー

61) D126 写本では taba'iyat を線で抹消し、書写人の同一筆跡で tahnīyat と記す。ms. 3357, fol. 9a では tarbiyat, Or. 5338, fol. 5a では tabqiyat, Or. 9660, fol. 5a; Or. 9662, fol. 8b では taba'iyat. tarbiyat が文脈にふさわしいと思われる。

62) この段落から p. 12 / fol. 6b の第一段落までの語り伝えと同じ話が、1603 年頃にペルシア語で作成されたホージャ・イスハークの伝記, Muḥammad 'Awaḍ 著 *Ḍiyā' al-qulūb* にある (*Ḍiyā' al-qulūb*, Houghton Library, fol. 4b-6b; Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiiskoi Akademii nauk, A1615, fol. 5a-7a)。これらの逸話については白海提(パフティヤール・イスマーイー)「ホージャ・イスハークの伝記 *Ḍiyā' al-Qulūb*——その構成と執筆意図をめぐって——」『西南アジア研究』第 72 号, 2010 年, 57-58 頁) も参照のこと。

63) D126 写本には「アーザム」の語が欠けている。ms. 3357, fol. 9b; Or. 5338, fol. 5b; Or. 9660, fol. 5a; Or. 9662, fol. 9a により補う。

64) *Ḍiyā' al-qulūb*, Houghton Library, fol. 5a: A1615, fol. 5b では「バン市場 (nān bāzār)」である。

ド (Āḥvund Mullā Sa‘īd) は学識の完全な極みにあったが、次のように言っている。ある日、わたしはマフドゥーミ・アーザム猯下のもとで仕えていた。猯下は次のように言った。「おお、ムッラー・サーイドよ、この子ホージャ・イスハークは非常に高く飛ぶ人となる。その最初の徴候は次の通りである。この子が誕生した夜、わたしは夢で太陽のごとき光が来て、小生の眼孔に入った。家は太陽のごとく照らされた。至高の神が一人の息子を授けたという知らせが届けられたのは夜明けの時であった。わが視線がこの子に落ちたとき、まさにそれほどの明るさが我が心に現れた。わが家から暗さや祝福のなさが消えた。わたしがこの子を見ている時はいつでも、まさにこの太陽が我が心に輝いている」と言った。

【p. 12 / fol. 6b】語り伝えである。ホージャ・ムハンマド・カースィムは次のように言った。ある日、ある者がマフドゥーミ・アーザム・パーディシャー猯下に一頭の馬を捧げ物として持ってきた。猯下はその馬をホージャ・イスハーク・ワリーに与えた。その後、イーシャーニ・カラーン⁶⁵⁾が見て、「この馬はわたしに相応しいようだ」と言って馬を奪い取った。マフドゥーミ・アーザム猯下は聞きつけ、反対して〔ホージャ・イスハーク・ワリーに〕言った。すなわち、「もし馬が彼のものとなるならば、精神的系譜 (nisbat-i ma‘nī) はそなたのものにせよ」と言った。その夜に馬が死んだと、幾人かの者は言っている。ホージャ・イスハーク猯下は「馬の死体をわたしに与えよ。祈願 (du‘ā) すれば、馬は生き返る」と言った。マフドゥーミ・アーザム猯下は聞きつけ、おし止めた⁶⁶⁾。

語り伝えである (naqlī dur ki)⁶⁷⁾。ハーフィズ・ニザーム⁶⁸⁾はイーシャーニ (尊師) の秘奥の親友、側近たる門弟 (yārān-i ḥāṣṣ) の一人であったが、ある日、猯下に仕えてイスフィドゥーク (Isfīdūk)⁶⁹⁾ にいた。イーシャーニ猯下 (Ḥaḍrat-i Īṣān)⁷⁰⁾〔ホージャ・イスハーク〕は門弟たち (yārānlar) に向かって言った。すなわち、「旅の準備をせよ。バルフ (Balḥ) の城市の気候に触れ散策してみたい」と言って、門弟たちとともにバルフへ向かった。バルフでは、マフドゥーミ・アーザム猯下のハリーフアの一人であったムッラー・ムハンマディー・サッハーフ

65) 本書 (p. 9 / fol. 5a) に述べられているように、イーシャーニ・カラーンはマフドゥーミ・アーザムの一番目の妻から生まれた最初の息子である。

66) Or. 9662, fol. 10a-b では、マフドゥーミ・アーザムがおし止めたことは述べられておらず、「イーシャーニ・カラーンは馬の死体を渡した。まさにその時〔ホージャ・イスハークは〕祈願した。祈願は聞き届けられた。馬は生き返った」とされている。

67) この段落から p. 15 / fol. 8a の前半までの語り伝えと同じ話が、*Ḍiyā' al-qulūb* にある (Houghton Library, fol. 8b-12b; A1615, fol. 9b-13b)。

68) この人物の名は D126 写本; ms. 3357, fol. 11a; Or. 5338, fol. 6a; Or. 9660, fol. 6a では Ḥāfiẓ Nizāmī, Or. 9662, fol. 10b では Ḥāfiẓ Nizām al-Dīn であるが、*Ḍiyā' al-qulūb* の表記 (Ḥāfiẓ Nizām) に従う。

69) 本書 (p. 12 / fol. 10b) で後述されるように、サマルカンドのクーハク河近くの地名。

70) D126 写本と Or. 5338, fol. 6a では Ḥaḍrat-i Īṣān-i Kalān であるが、ms. 3357, fol. 11a; Or. 9660, fol. 6a; Or. 9662, fol. 10b は Ḥaḍrat-i Īṣān とする。後者に従う。

ガル (Mullā Muḥammadī Ṣaḥḥāfgar)⁷¹⁾ が、猊下につき添うためにアム河⁷²⁾ まで出迎えに行った。そして、それなりの奉仕の条件を成し遂げた。バルフの城市の貴庶の人びとが出迎えた。しかし、**[p. 13 / fol. 7a]** マフドゥーミ・アーザムの大ハリーフア (uluḡ ḥalīfalar) の一人でもあったアーホンド・ムッラー・フルダク (Āḥvund Mullā Ḥvurdak) は出迎えなかった。「わたしはマフドゥーミ・アーザム猊下から完全な允許を得た者、ホージャ・イスハーク猊下はマウラーナー・ルトフ・アッラー (Mawlānā Luṭf Allāh) から允許を得た者。いくら我々のマフドゥームザーダ (マフドゥーミ・アーザムの子孫) であっても、我々はその方よりも先達 (pīš qadam) である」と言って気にならなかった。猊下は城市に入った。[アーホンド・ムッラー・フルダクは] そこにも来なかった。この事で猊下は不快になった。

[ピール・] ムハンマド・ハーン⁷³⁾ がバルフに対して王であった。数日後、[ハーンは] こそこそ告げる者たち (gammāzlar) の言葉により猊下に懇願した。「ハリーフア・ムッラー・フルダクは老人 (pīr) になっている。ここに来る力がない。あなた様が行って会えば、同情しなくはないでしょう」と。ホージャ・イスハーク猊下は [ピール・] ムハンマド・ハーンの懇願によりハリーフア・フルダクの [家の] 門に至った。ハリーフアは出てこない。ハーンは「わたしが懇願して猊下を連れてきても、ハリーフアは家から出てこない」と考え込んでいた。しかし何ということか、猊下の眼から涙が流れている。ハーンは「泣く理由はなにか」と尋ねた。ホージャ・イスハーク・ワリーは「病人を見舞うために、我々を連れてきたのか、それとも、喪に服するためなのか」と言った。ハーンは驚いて人を入らせてみると、ハリーフアは死んでいた。人びとは皆、ホージャ・イスハーク・ワリー猊下がハリーフアに悪しき祈願 (du‘ā-yi bad) をなしたのであろうと決めつけた。**[p. 14 / fol. 7b]** ハリーフアを信奉する若干の人びとはイーシャーン猊下に恨みをいだいた。

71) D126 写本では ṢHAFKYR と綴るが、ms. 3357, fol. 11a; Or. 5338, fol. 6b; Or. 9660, fol. 6b の ṢHAFKR による。なお、*Ḍiyā’ al-qulūb*, Houghton Library, fol. 9a; A1615, fol. 9b では Mullā Muḥammad Ṣaḥḥāf と記す。

72) D126 写本; Or. 9660, fol. 6b; Or. 9662, fol. 10b では Daryā-yi ‘Amūr, ms. 3357, fol. 11a と A グループの写本 D191, fol. 19b では Daryā-yi ‘Amūd と表記されているが、*Ḍiyā’ al-qulūb*, Houghton Library, fol. 9a; A1615, fol. 9b および A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 16a) の Daryā-yi Āmū の表記に従う。

73) この人物の名は D126 写本; ms. 3357, fol. 11b; Or. 5338, fol. 6b; Or. 9660, fol. 6b; Or. 9662, fol. 11a および A グループの写本 (D191, fol. 20a) では Muḥammad Ḥān であるが *Ḍiyā’ al-qulūb*, Houghton Library, fol. 9a; A1615, fol. 10a および A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 16b) の表記 Pīr Muḥammad Ḥān に従う。1546 年から 1567 年までバルフで統治したシャイバーニー朝のピール・ムハンマド (*Schaibanidsche Grabinschriften*, herausgegeben von Baxtiyar Babadjanov, Ashirbek Muminov, Jürgen Paul, Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag, 1997, p. 121. Note 1) であろう。

ハリーファの不幸が済んで暫くして後、ハーンの子の五歳の息子⁷⁴⁾が病気になった。三日後、ホージャ・イスハーク・ワリーが見に行つた。時が経っていた。スルターンが死亡したという知らせが届いた。〔ピール・〕ムハンマド・ハーンは動揺して家に入り、子が死んでいるを見た。〔ハーンは〕全く取り乱し、死んだ子を抱きかかえ出て、猯下の足もとに置いた。「猯下様には至高なる神への親近さがある。〔猯下が〕祈願するならば、おそらく〔神は〕この子に生命を下賜するだろう」と言った。ホージャ・イスハーク・ワリー猯下は真心をもって祈願した。すなわち、「神よ、おお、困窮した者たちを助ける者よ、この哀れな者に恥をかかせるな」と言って、至高の神が祈願に応じるほどに号泣した。スルターンはくしゃみをして起きあがった。バルフの城市に、ホージャ・イスハーク猯下は死者を生き返らせているそうだ、というほどの評判がたった。

さて、過ごしていた日々のある日、ホージャ・イスハーク・ワリー猯下が立ち寄った所に一本のプラタナスがあった。そのプラタナスで鷹が獲物を襲っていた⁷⁵⁾。さて、〔この鷹は〕ハーンの子をいじめていた。〔ピール・〕ムハンマド・ハーンは仕方なくホージャ・イスハーク・ワリーに「猯下が祈念 (tawajjuh) [p. 15 / fol. 8a] すれば、この鷹が捕らえられれば」と部下を遣った。猯下は瞑想 (murāqaba) から頭をあげて、「ハーンよ、我々を獵師にしているのか」と言った。ハーフィズ・ニザーム⁷⁶⁾を見て、「おまえが登って、この鷹を捕まえて下りてこい」と言った。ハーフィズは登り、捕まえて下りてきた。ハーンの子に〔鷹を〕渡した。この事はホージャ・イスハーク・ワリー猯下を悲しませた。猯下はバルフからヒサル地方 (Hiṣār wilāyati) に向かった。〔ピール・〕ムハンマド・ハーンは数日後、病気になった。この病気でハーンは逝去した。

物語の章。聞かなければならない。

ホージャ・イスハーク・ワリー猯下にマフドゥーミ・アーザムから明白には教導の允許は

74) この人物の名は A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 16b; D191, fol. 20b) および *Ḍiyā' al-qulūb*, Houghton Library, fol. 10a; A1615, fol. 11a によると、シャー・ムハンマド・スルターン (Šāh Muḥammad Sulṭān) である。

75) D126 写本では AVVALAĞAN, ms. 3357, fol. 12b では AVALAĞAN, Or. 9660, fol. 7b では AVALAĞAN, Or. 9662, fol. 12a では AVALAN である。avlağan (獲物を襲った) と読む。

76) この人物の名は D126 写本; Or. 5338, fol. 7b; Or. 9660, fol. 7b では Ḥāfiẓ Nizāmī, ms. 3357, fol. 13a では Ḥāfiẓ Nizām, Or. 9662, fol. 12a では Ḥāfiẓ Nizām al-Dīn であるが、*Ḍiyā' al-qulūb* の表記 (Ḥāfiẓ Nizām) に従う。

なっていなかった⁷⁷⁾。マウラーナー・ルトフ・アッラー猥下 (Ḥaḍrat-Mawlānā Luṭf Allāh)⁷⁸⁾ から教導の允許がなっていた。マウラーナー・ルトフ・アッラーはマフドゥーミ・アーザムにとって乳兄弟の間柄⁷⁹⁾ であった。マウラーナー・ルトフ・アッラーはマフドゥーミ・アーザム・パーディシャーから教導の允許を得ていた⁸⁰⁾。マフドゥーミ・アーザム・パーディシャー猥下は死去の際にマウラーナー・ルトフ・アッラーに允許を与えていた。その時、ホージャ・イスハーク・ワリーはブハラ (Buḥārā) で学んでいた。マウラーナー猥下は人を遣って連れて来させ、〔自分の〕娘を嫁がせ⁸¹⁾、マウラーナーに委託されていた〔精神的系譜〕⁸²⁾ を使徒猥下<彼の上)に平安がありますように>の良きお告げにより、その委託を〔ホージャ・イスハークに〕まかせた。門弟たちに「わが老師【p. 16 / fol. 8b】マフドゥーミ・アーザムから私に留まっていたものはどれも、わたしはホージャ・イスハーク・ワリーに与えた。今や、そなたたちは彼から求めるように」と言って〔ホージャ・イスハーク・ワリーに〕允許を与えた。

しかし、イーシャーニ・カラーン (Īshān-i Kalān) の弟子・信奉者 (murīd muḥliṣ) たちの信念は、系譜はマフドゥーミ・アーザムからホージャ・ムハンマド・イスラーム (Ḥōja Muḥammad

77) Or. 9660, fol. 7b と Or. 9662, fol. 12a は「明白に教導の允許はなっていた」と記すが、本段落の内容からすれば、その記述は誤りである。

78) ナクシュバンディー教団の有名な指導者ルトフ・アッラー・チュステイー (1485年頃-1571年)。詳しくは、B. M. Babadzhanov, “Lutfallakh Chusti,” in S. M. Prozorov (ed.), *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slovar’*, Vypusk 1, Moscow: Izdatel’skaia firma «Vostochnaya literatura» RAN, 1998, pp. 65-66 を参照のこと。

79) D126 写本; ms. 3357, fol. 13a; Or. 5338, fol. 7b; Or. 9660, fol. 7b では hamšīra-zāda, Or. 9662, fol. 12b および A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 17b; D191, fol. 21b) では hamšīra と記す。

80) この一文は A グループの写本にはなく、その代わりに「マウラーナー・ムハンマド・カーディー猥下からマウラーナー〔・ルトフ・アッラー〕猥下に教導の允許がなされていた。しかし、精神的系譜は長老猥下〔マウラーナー・ムハンマド・カーディー〕から (ḥaḍrat-i pīrlāridin) マフドゥーミ・アーザム猥下に伝わっていた。そのためマウラーナー・ルトフ・アッラーは系譜をさかのぼって、マフドゥーミ・アーザム猥下に改換していた。」(D191, fol. 21b; Cf. Turk d. 20, fol. 17b) と記されている。

81) マウラーナー・ルトフ・アッラーがホージャ・イスハーク・ワリーに自分の娘を嫁がせ、シャイフの免状を与えたという話は *Diyā’al-qulūb* にある (白海提 (バフティヤール・イスマール) 「ホージャ・イスハークの伝記 *Diyā’al-Qulūb*——その構成と執筆意図をめぐって——」 58 頁)。

82) D126 写本と Or. 5338, fol. 7b では M’VNKH とのみ記されているが、文意が通じないので、他の写本 (ms. 3357, fol. 13b; Or. 9660, fol. 8a; Cf. Or. 9662, fol. 12b) により ol nisbat-i ma’nawī ki を補足する。

Islām)⁸³⁾に留まり,〔それから〕⁸⁴⁾ホージャ・ムハンマド・エミン (Hōja Muḥammad Emīn) に留まり, それからイーシャーニ・カラーンに留まった, ということである⁸⁵⁾。

要するに, ホージャ・イスハーク・ワリーは⁸⁶⁾、かの猓下〔預言者ムハンマド〕<アッラーが彼に祝福と平安をあたえますように>の外形に似ていた。それ故にマフドゥーミ・アーザムは「私が使徒猓下<彼の上に平安がありますように>を夢で見るたびに, 〔使徒猓下は〕まさにこの子〔ホージャ・イスハーク〕の姿で表れている⁸⁷⁾。それ故に私は〔わが子ホージャ・イスハークを〕尊敬している」と言っていた。

語り伝えである。アブド・アルラティーフ・スルターン (‘Abd al-Laṭīf Sulṭān) はウルゲンチのハーン家の出であった (Urgenč ḥānlarıdın erdilār)。そしてまたホージャ・イスハーク・ワリーに対してハリーフアであった。〔アブド・アルラティーフ・スルターンは〕次のように言っている。ある日, わたしは使徒〔預言者ムハンマド〕<彼の上に平安がありますように>の美德の書 (šamāyil nāma) を読んでいた。わたしは意識を失った (özimdin bardım)。夢で, ホージャ・イスハーク・ワリー猓下が預言者猓下の姿のごとく坐しているのを見た。祝福されたその眼⁸⁸⁾から光が網でとらえられている〔ようになっている〕。わたしは驚いた。猓下は頭を上げて, 「時

83) ホージャ・ムハンマド・イスラーム, すなわちホージャ・イスラーム・ジュイーバーリー (1563年没) はプハラにおけるナクシュバンディー教団の有力な指導者であり, ルトフ・アッラー・チュステイーと激しく対立した。詳しくは, B. M. Babadzhanov & Maria Szuppe “Dzhuybari,” in S. M. Prozorov (ed.), *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slovar’*, Vypusk 3, Moscow: Izdatel’skaia firma «Vostochnaya literatura» RAN, 2001, pp. 36-38; 白海提 (バフティヤール・イスマーイル) 「ホージャ・イスハークの伝記 *Ḍiyā’ al-Qulūb*——その構成と執筆意図をめぐって——」 50-51 頁を参照のこと。

84) andīn. D126 写本への補筆および ms. 3357, fol. 13b; Or. 5338, fol. 8a; Or. 9660, fol. 8a; Or. 9662, fol. 12b による。

85) ホージャ・ムハンマド・エミン (アミン) からイーシャーニ・カラーンに系譜が受け継がれたということであるが, 両者は同一人物であるので, この最後の文章は正しくない。A グループの写本では「しかし, イーシャーニ・カラーン猓下の側の弟子・信奉者たちの信念は次のようである。精神的系譜はマフドゥーミ・アーザム猓下から, かの高位で至高の意図たる, ホージャ・ジュイーバーリー〔の別名〕で知られるホージャ・ムハンマド・イスラームに留まった。それから, イーシャーニ・カラーンで知られるホージャ・ムハンマド・アミンに伝わった」(Turk d. 20, fol. 18a; Cf. D191, fol. 21b) と正しく記述されている。B 系統の写本がイーシャーニ・カラーンとその子孫について正確な情報を有していなかったことは, 両系統の写本の作成時の違いを考える上である種の示唆を与えているように思われる。なお, 本書の後述の箇所 (p. 23 / fol. 12a) にも誤った記述が見られる。

86) D126 写本と Or. 5338, fol. 8a では Hōja/Hvāja Ishāq Walīnī と記すが, ほかの写本 (ms. 3357, fol. 14a; Or. 9660, fol. 8a; Or. 9662, fol. 13a) のように対格の nī は不要である。

87) D126 写本と Or. 9662, fol. 13a では dur men であるが, ほかの写本 (ms. 3357, fol. 14a; Or. 5338, fol. 8a; Or. 9660, fol. 8a) の durlar/dur が正しい。

88) Or. 9662, fol. 13a では「眼」ではなく「顔」(yüz) と記す。

には子が父祖たちに似ているとしても、なんの不思議があらう」と言った。私は、「ご主人さま」(taqşır)⁸⁹⁾と書いた。

語り伝えである。ホージャ・イスハーク・ワリーをアブド・アルカリーム・ハーン(‘Abd al-Karīm Ḥān)⁹⁰⁾が招いて、カシュガルに連れてきた。数日後、ハーンは【p. 17 / fol. 9a】猊下にあまり好意をもたなくなった。それで猊下はカザークの地方(Qazāq diyāri)に行った。そこで靈感奇蹟(kaşf karāmatlar)を起こして、多くの人々がイスラームに高められる榮譽に浴した。彼の祈願で死者は魂をみいだし、病人は治癒し、泉が流れだし、驚くべき不思議なことが起こり、十八の偶像寺院(but-ḥāna)が壊れた。十八万のカーフィル(不信仰者)がムスリムとなった。

さて、アブド・アルカリーム・ハーンはまた人を遣って謝りに来て、〔ホージャ・イスハークを〕連れてきた。しかし、好意のなさは変わらなかった⁹¹⁾。しかし、ムハンマド・スルターン(Muḥammad Sulṭān)はアブド・アルカリーム・ハーンに対して婿(dāmād)⁹²⁾であったが、ホージャ・イスハーク・ワリーに対する誠意の気持ちは強かった。ある日、夜明けの時に〔ムハンマド・スルターンは〕猊下に仕えに来た。猊下は「おお子よ、わずかな時機で、これらの地方の王権(bu wilāyatniṅ pādişāhliqi)はあなたに確実となる」と言った。ムハンマド・スルターンは起き上がって、お辞儀をして坐った。そして、「もしそのようになれば、わが生命は〔あなたへの〕捧げ物(niyāz), それから、すべての地方も捧げ物」と言った。

89) 濱田正美氏によると、taqşırは本来「欠点、過ち」を意味するアラビア語の単語であり、東テュルク語において敬意の呼びかけ語として用いられる(Masami Hamada, “L’Histoire de Ḥotan de Muḥammad A’lam (III) Commentaires avec deux appendices,” *Zinbun: Memoirs of the Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto University*, No. 18, 1982, p. 69)。ユージン氏によれば、taqşırはロシア語でgospodinの意味である(V. P. Yudin, “Izvestiya «Ziya’ al-kulub» Mukhammad Avaza o Kazakhkh XVI veka,” *Vestnik Akademii nauk Kazakhskoi SSR*, Alma-Ata, No. 5, 1966, p. 75, note 22)。

90) D126写本では‘Abdū Karīm Ḥān, ms. 3357, fol. 14b; Or. 9660, fol. 8bでは‘Abd al-Karīm Ḥān, Or. 5338, fol. 8a; Or. 9662, fol. 13bでは‘Abd Karīm Ḥān。以下、この人名の表記の違いについては注記せず、「アブド・アルカリーム・ハーン」と表記する。なお、アブド・アルカリーム・ハーンはモグール・ハーン国(ヤルカンド・ハーン国、カシュガル・ハーン国)の第3代君主(在位1559/60-1591/92年)である。

91) D126写本とOr. 5338, fol. 8bではiltifātliḡi kam bolmadī, ms. 3357, fol. 15aではkam iltifātliḡi kam bolmadī, Or. 9660, fol. 8bではiltifātliḡ bulardīn kam boldī, Or. 9662, fol. 13bではkam iltifāt boldīとなっている。ms. 3357, fol. 15aに従う。

92) ムハンマド・スルターンはアブド・アルカリーム・ハーンの実弟である(澤田稔「ホージャ・イスハークの宗教活動——特にカーシュガル・ハーン家との関係について——」61頁)が、その婿となったかどうか、他の史料からは確認できていない。

さて (ersä), アブド・アルカリーム・ハーンはカンジャーフル (Kanjäfur)⁹³⁾ に軍勢を率いようとした。猊下は「無駄に終わる (bī-kār bara dur)」と言った。朝、三万の軍勢とともに馬駆けて、七日経過してから、ある夜に稲妻が発生し、彼らの耳には多くの馬の足音に〔聞こえ〕、彼らは夜襲かと疑い、テントや大天幕を投げだして逃げ帰った。しかし、何事もなかった。それをホージャ・イスハーク・ワリー猊下は聞いて、〔ムハンマド・スルターンに〕「あなたは速やかに行きなさい。カンジャーフルはあなたの手中で征服される」と言った。ムハンマド・ハーン⁹⁴⁾ は五百人とともに馬駆けて、ブルガールの【p. 18 / fol. 9b】城市 (šahr-i Bulgār)⁹⁵⁾ に行った。そこのハーンは知らずにいたらしい。捕らえて殺し、その地方を征服して、猊下の前に来て、その城市を猊下への捧げ物とした。これを聞いて、アブド・アルカリーム・ハーンの敵意は増した。ある日、アブド・アルカリーム・ハーンの話になった (araġa ħikāyat-i ‘Abdū Karīm Hān tüšti)。ホージャ・イスハーク・ワリー猊下は、「我々をアブド・アルカリーム・ハーンの災いから保護⁹⁶⁾ することを、わたしは至高の神に期待する」と言って頭を下にさげた。門弟たちも頭を下にさげて、瞑想 (murāqaba) に入った。

ムッラー・サンギーン・ハリーフア (Mullā Sangīn Ḥalīfa) は次のように言っている。すなわち、わたし自身を、あるチャハール・バーク⁹⁷⁾ で見た。この世にそれと同等の庭園はないだろう。ある池の畔で王座の上に預言者猊下<彼の上に平安がありますように>が坐っている。ホージャ・イスハーク・ワリー猊下は彼の向かいにいて、アブド・アルカリーム・ハーンの好意のなさについて話している。使徒猊下<彼の上に平安がありますように>は上を見た。すると、プラタナスの木の上にコウノトリが一羽とまっている。使徒猊下<彼の上に平安がありますように>は「叩け、このコウノトリを。とても大きな声をあげている」と言った。ホージャ・イスハーク・ワリー猊下は杖でその頸を叩いた。〔コウノトリは〕木の上から地面に落ちた。ホージャ・イスハーク・ワリー猊下は頭を上げた。私も我にかえり、驚いて、「ご主人さま」と言った。三日後、「アブド・アルカリーム・ハーンが死んだ。王権はムハンマド・ハーン⁹⁸⁾ に確立した」という知らせが届いた。

93) 甘州府 (Ganzhou-fu) を指していると考えられる。詳しくは、R. B. Shaw, *op. cit.*, p. 33, note 6 を参照。

94) ムハンマド・スルターンを指している。

95) D126 写本と Or. 9662, fol. 14a では BLĠAR, ms. 3357, fol. 15b; Or. 9660, fol. 9a では BLĠARY, Or. 5338, fol. 9a では BVALĠARY。固有名詞としての読みは暫定的である。

96) D126 写本と Or. 9662, fol. 14b では PNA であるが、ms. 3357, fol. 15b; Or. 9660, fol. 9a の PNAH により panāh と読む。

97) 庭園の様式。水路と通路で整然と区画された、四つの部分からなる庭園。通常は中央に貯水池が設けられる。間野英二『バーブル・ナーマの研究Ⅲ』京都：松香堂、1998年、38頁、注268を参照。

98) モグール・ハーン国の第4代君主 (在位 1591/92-1609/10年)。

【p. 19 / fol. 10a】 詩

敬虔な人の心を苦しめる者は
疑いなく自分の手で自分の絆を切る

〔物語の〕章。知らなければならない⁹⁹⁾。

ホージャ・イスハーク・ワリー猯下はヤルカンド、カシュガル、アクス (Aqsū) にいて、十二年滞在した。多くの人々を正しい道に導き、ムスタファー〔預言者ムハンマド〕の聖法 (シャリーア) を広めた。いくらかの人々を完全性の所有者にして、自らはサマルカンド (Samarqand) に帰還した。カシュガルにウシュトゥル・ハリーフア (Uštur¹⁰⁰⁾ Ḥalīfa) をハリーフア (代理人) にしていた。イーシャーン猯下 [ホージャ・イスハーク・ワリー] が去って数日後¹⁰¹⁾、ムハンマド・ハーンの信仰心が弱くなった。カシュガルの人々は「我々は奉納・捧げ物を (nazr niyāzimizni) スルターン・アルフ・アタ (Sulṭān Alf-ata)¹⁰²⁾ にして、彼から助けを求める」と言って、トゥルファン (Tūrfān) に行った。ウシュトゥル・ハリーフアは力の強い男であった。その一団とともに行って、これらの者たちの前でスルターン・アルフ・アタの墓 (qabr) に跨って〔手足を〕ばたばたさせた¹⁰³⁾。人々はみな見てびっくりした。まさにその時、一頭の龍がウシュトゥル・ハリーフアム (Ḥalīfam)¹⁰⁴⁾ をねらった。

ところで、ホージャ・イスハーク・ワリーはサマルカンドに [おり]、ホージャ・シャフバー

99) D126 写本では fašl bilmäk keräk と記すが、ms. 3357, fol. 16b; Or. 9660, fol. 9b; Or. 9662, fol. 15a では fašl-i dāstān išitmäk keräk と記す。

100) D126 写本では AVŠTV (但し 4 行後では AVŠTVR), ms. 3357, fol. 16b では AVŠTR, Or. 5338, fol. 9b; Or. 9660, fol. 9b; Or. 9662, fol. 15a では AVŠTVR と記す。いずれもペルシア語の AŠTR (Uštur, 「ラクダ」の意) の誤記である。

101) D126 写本では「一日後」(bir kündin kīn) と記すが、ms. 3357, fol. 16b; Or. 5338, fol. 9b; Or. 9660, fol. 9b; Or. 9662, fol. 15a の「数日後」(bir nečä kündin kīn) が正しいであろう。

102) Alf-ata は Alp-ata (アルプ・アタ) の訛りである。トゥルファン盆地のアルプ・アタ廟については、Hodong Kim, “The Cult of Saints in Eastern Turkestan: The Case of Alp Ata in Turfan,” *Proceedings of the 35th Permanent International Altaistic Conference*, Taipei, 1992, pp. 199-226, 新免康・真田安・王建新『新疆ウイグルのパザールとマザール』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2002 年, 176-180 頁に詳しい。

103) D126 写本では DHBVNDYLLAR と綴るが、ms. 3357, fol. 16b の DAPNDYLLAR により dāpindilār と読む。なお、「手足を」(qol ayaglari birlä) の語句は D126 写本になく、Or. 5338, fol. 9b; ms. 3357, fol. 16b により補う。

104) D126 写本, Or. 5338, fol. 9b; Or. 9662, fol. 15b では ḤLFM と綴るが、ms. 3357, fol. 16b; Or. 9660, fol. 9b の綴り (ḤLYFM) に従う。

ズ・ホージャム (Hōja Šahbāz Hōjam)¹⁰⁵⁾ はアクスにおいて七歳であり、遊ばせていた¹⁰⁶⁾。ウシュトゥル・ハリーフアの代わりにしてスルターン・アルフ・アタの矢に、シャフバーズが代わりであると言って、むけた。その家族は・・・¹⁰⁷⁾を見て泣いて、[ホージャ・シャフバーズ・ホージャムは] 死んだ。弟子たちは出来事を尋ねた。猥下はウシュトゥル・ハリーフアに起きた【p. 20 / fol. 10b】出来事を説明して、「シャフバーズが行けば、シャーディー (Šādī)¹⁰⁸⁾ が来る」と言った。この時¹⁰⁹⁾を年代表示銘 (tārīḥ) にして書いておいた。[ホージャ・シャーディーは] ウシュトゥル・ハリーフアの後に [教団のことを] 治めた。アクスでシャフバーズ・ホージャムが死んだのは、[ホージャ・シャーディー誕生の] 前後、一時間もたっていない。

語り伝えである。プハラからアブド・アッラー・ハーン (‘Abd Allāh Ḥān) が弟のドストウム・スルターン¹¹⁰⁾を五万の軍勢とともにカシュガルを征服するために派遣した。しかし、ムハンマド・ハーンは知らせのないままであった¹¹¹⁾。ホージャ・イスハーク・ワリー猥下は夢で [ムハンマド・ハーンに] 知らせた。ムハンマド・ハーンは自ら城市に入り (özini šahrgā alīp), カシュガルを固めた。ドストウム・スルターンの軍勢は城市をいくらか取り囲んで下馬した。ムハン

-
- 105) ホージャ・シャフバーズは、本書で後述されるように、ホージャ・イスハーク・ワリーの子である。
- 106) oynaṭıp olturur erdi (D126 写本)。ms. 3357, fol. 17a; Or. 5338, fol. 9b; Or. 9660, fol. 9b; Or. 9662, fol. 15b では「遊んでいた」(oynap olturur edi/edilār/erdilār)。
- 107) bir JYR という語句が入るが意味不明である。
- 108) 「喜び」(šādī) とホージャ・シャーディーの掛け言葉であろう。本書で後述されるように、ホージャ・シャーディーはホージャ・イスハーク・ワリーの子である。šahbāz は「ハヤブサ」であるから、「ハヤブサが行けば、喜びが来る」という意味にもなる。
- 109) D126 写本では wāqī‘a (「出来事」と記すが、ms. 3357, fol. 17a; Or. 5338, fol. 10a; Or. 9660, fol. 10a; Or. 9662, fol. 15b の waqt (「時」) による。
- 110) D126 写本; ms. 3357, fol. 17a; Or. 5338, fol. 10a; Or. 9660, fol. 10a; Or. 9662, fol. 16a では RSTM (Rustam) と綴られているが、*Ḍiyā‘ al-qulūb*, Houghton Library, fol. 27b, 88b, 110b では DVSTVM (Düstüm), A1615, fol. 30b, 103a では DVSTM (Düstum) と綴られている。アキムシュキン氏の研究によれば、『タズキラ・イ・ホージャガーン』の綴りは誤りで、Dostum-sultan が正しい。O. F. Akimushukin, *Shakh Makhmud ibn Mirza Fazil Churas, Khronika, Kriticheskii tekst, perevod, kommentarii, issledovanie i ukazateli*, Moscow: Nauka, 1976, p. 285, note 137 参照。以下、本書の「ルスタム・スルターン」は「ドストウム・スルターン」に改める。
- 111) D126 写本と Or. 9660, fol. 10a では bī- ḥabar AURURLAB yürür erdi/edilār, ms. 3357, fol. 17a では bī- ḥabar AUAULAB yürür edi, Or. 5338, fol. 10a では bī- ḥabar erdi と記されているが、AURURLAB も AUAULAB も動詞であると思われるが、読みと意味は不明である。なお、Or. 9662, fol. 15b には、この一文はない。

マド・ハーンには、この軍勢の前で自らの軍勢は小さな粒子でさえない¹¹²⁾ ように見えた。〔ムハンマド・ハーンは〕頭を床につけて、祈祷 (munājāt) しながら泣き悲しんでいた。突然、ホージャ・イスハーク・ワリーが現れて、「悲しむな。翌日、負かすことができるはずだ。勝利はおまえの側にある」と言った。その翌日、ムハンマド・ハーンは五千の軍勢とともに出て戦い、打倒した。猥下は「用心せよ。後ろから追いかけるな」と言っていた。唐突に追いかけていたならば、一人も生き残らなかった。ドストウム・スルターンはカシュガルから戻って、二百テンゲ (tāngā) ¹¹³⁾ の捧げ物をサマルカンドへ、ホージャ・イスハーク・ワリー猥下に送らせて、自らはプハラへ、兄アブド・アッラー・ハーン¹¹⁴⁾のもとに行き、「ホージャ・イスハーク・ワリーが【p. 21 / fol. 11a】白い馬で白い装束で城市から出てきて戦い、打倒したように見えた。〔我々の〕軍勢はBASRVQ¹¹⁵⁾となった。我々は仕方なく逃げて戻った」と言った。アブド・アッラー・ハーンに敵意が生じ、まさにその敵意をもちながら死去した。

さて、ムハンマド・ハーンはこの城市〔カシュガル〕を猥下へ捧げ物とした。暫く経って、ホージャ・イスハーク・ワリー猥下は移ろいやすい世からとこしえの世へ旅立った。ホージャ・イスハーク・ワリーをイスフィドゥーク (Isfidūk) に埋葬した。マフドゥーミ・アーザム・パーディシャー猥下をダフビード (Dahbīd) に埋葬していた。ダフビードとイスフィドゥークの間に河 (nahr) がある。南側はイスフィドゥーク、北側はダフビードである¹¹⁶⁾。さて、ホージャ・イスハーク・ワリーを父のマザール¹¹⁷⁾に置かないこと理由は次の通りであった。マフドゥー

112) D126 写本の bu laškarnīñ aldīda öz laškarī zarrača yoq による。Or. 5338, fol. 10a では bu laškarnīñ arasīda öziniñ laškarī ZRJA yoq と記す。ZRJA の読みと意味は不明。ms. 3357, fol. 17b では「この軍勢の前で自らの軍勢は大河の前の一滴〔である〕」(bu laškarnīñ aldīda öz laškarī daryāniñ aldīda qatṛa) と記す。Or. 9662, fol. 16a では「この軍勢は大河、その前で自らの軍勢は一滴〔である〕」(bu laškar daryā, anīñ aldīda öz laškarī qatṛa) と記す。Or. 9660, fol. 10a では「この軍勢の前で自らの軍勢は大河の前の小渠ほどもない」(bu laškarnīñ aldīda öznīñ laškarī daryāniñ aldīda ariqča yoq) と記す。

113) テンゲは名目貨幣で、ブルという銅銭 50 枚が 1 テンゲに相当する (堀直「清代回疆の貨幣制度——普爾鑄造制について——」『中嶋敏先生古稀記念論集 (上巻)』東京：汲古書店、1980 年、587 頁、小松久男 (編)『新版世界各国史 4 中央ユーラシア史』東京：山川出版社、2000 年、305 頁)。

114) D126 写本のみが「アブド・アッラー・ハーン」の名を記している。ただし、写本には抹消線が引かれている。

115) この語の読み (恐らく basruq) と意味は不明である。

116) A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 21a; D191, fol. 25a) では「北面がイスフィドゥーク (Isfidūk) で、南面がダフビードである」と記されており、両地の位置関係が反対になっているが、拙稿で指摘したように誤りである (澤田稔「ホージャ家イスハーク派の形成——17 世紀前半のタリム盆地西辺を中心に——」『西南アジア研究』第 45 号、1996 年、43 頁)。

117) D126 写本と Or. 5338, fol. 9b; Or. 9660, fol. 10b では mazārat, ms. 3357, fol. 18a; Or. 9662, fol. 16b では mazārāt と記されている。

ミ・アーザム猥下は「誰でも私〔と〕¹¹⁸⁾ 子のホージャ・イスハークの間に埋葬すれば、その人は天国の住民 (ahl-i bihiṣṭi) である」と言っていた¹¹⁹⁾。それ故に、〔ホージャ・イスハークは〕「私をイスフィドゥークに埋葬せよ」と遺言し命じていた。さらにこの方の遺体を、バーギ・ブランド (Bāg-i buland) に移した理由。ある日、ホージャ・イスハーク・ワリーは七歳であったが、マフドゥーミ・アーザム・パーディシャー猥下と門弟たち (yārānlar) の一団がクーハク河 (daryā-yi Kūhak) の前に来た。水があふれる時であった。ハリーフアたちのうち【p. 22 / fol. 11b】二人の者が河に入った。水を渡れなかった。ホージャ・イスハーク・ワリー猥下の激情が頂点に達し、水を鞭で叩いた。河は二つに分かれた。中に乾いた道が現れた。皆は渡った。しかし、マフドゥーミ・アーザムは「おお、子よ、我々の前で、そなたは水に傲慢なことをした。最後に、水はそなたに復讐せずにはおかない」と言った。結局、イスフィドゥークのマザールに水が近づいた。サマルカンドの王たち (pādīshāhlar) に良きお告げがあり、遺体をバーギ・ブランドに移して埋葬した。すべての地所を (tamām milk amlāk¹²⁰⁾ yerlərini) 光あふれるマザールにワクフとした。今も彼らの配下にある。

物語の章。聞かなければならない。

ホージャ・イスハーク・ワリー猥下から二人の息子が残っており、その一人はホージャ・クトブ・アッディーン (Ḥōja Quṭb al-Dīn) であり、現在その方の子孫はバーギ・ブランド〔において〕崇高なるマザール (mazārat-i ‘ālī) に対し祈願者 (du‘ā-gūy) である。もう一人はホージャ・シャーディー<アッラーよ、浄めたまえ>である。この方のマザールは首府 (pāy-taht) ヤルカンドにある。ホージャ・シャフバズ・ホージャム猥下が七歳でアクスにおいて死去し¹²¹⁾、〔その遺体を〕そのヤルカンドへ運んで来ることになった時、アクスの人々は老若みな希望して、我々にマザールは記念となろう、と言ってそこに〔アクスに〕埋葬した¹²²⁾。

ホージャ・イスハーク・ワリーは〔東トルキスタンの〕これらの城市から帰る時に、カシュ

118) ms. 3357, fol. 18b にのみ vā が入っている。

119) D126 写本と Or. 5338, fol. 10b では dep dur/durlar. ms. 3357, fol. 18b; Or. 9660, fol. 10b; Or. 9662, fol. 17a では dur dep edilār. 後者を採る。

120) D126 写本と ms. 3357, fol. 19a; Or. 5338, fol. 11a; Or. 9660, fol. 11a; Or. 9662, fol. 17a では、AMLAQ と綴られているが、AMLAK の誤記とみなす。

121) ホージャ・イスハークの子ホージャ・シャフバズの死去については、本書の前述の箇所 (p. 19 / fol. 10a) にも述べられている。

122) Mullā Mūsā Sayrāmī, *Tārīḥ-i amniyya*, Bibliothèque Nationale, Collection Pelliot, B 1740, fol. 18b-19a によると、ホージャ・シャフバズはアクスにおいてモグールのアフマド・ハーン (Aḥmad Ḥān) とエセンブガ・ハーン (Esān-buga Ḥān) のアルトゥン (Altun) と呼ばれた墓所の傍らに埋葬された。

ガルにウシュトゥル・ハリーフアを、イェンギ・ヒサル (Yengi Hişār) にホージャ・カースィム・ハリーフア (Hōja Qāsim Ḥalīfa) をホタン (Hotan) にイブン・ユースフ・ハリーフア (Ibn Yūsuf Ḥalīfa) を〔居らせ〕、ヤルカンドにホージャ・シャーディー・ホージャムを彼の礼拝用敷物 (sajjāda) に坐らせ、彼自身は〔サマルカンドに〕帰還していた。ホージャ・シャーディー【p. 23 / fol. 12a】・ホージャムは教導の位 (masnad-i iršād) に坐して、いくらかの人々を正しき道へ招いた。

さて、この時イーシャーニ・カラーンにも二人の息子が残っていた。その一人はホージャ・ユースフ (Hōja Yūsuf) であり、[もう]一人はホージャ・アフアーク (Hōja Āfāq) [である]¹²³⁾。ホージャ・アフアークは従順さにより (inqiyād birlā) 世界に聖者性をもって有名となり、多くの人々が彼に隷従の腰帯を結んだので、ホージャ・アフアークと名付けられた¹²⁴⁾。この二人の息子がダフビードからカシュガルにお越しになった¹²⁵⁾。カシュガルの人々は彼らに敬意を表した。この頃ムハンマド・ハーン (Muḥammad Ḥān) がこの世から旅立ち、統治の王座

123) イーシャーニ・カラーンの二人の息子というのは誤りである。ホージャ・ユースフはその息子であるが、ホージャ・アフアークはホージャ・ユースフの息子である。R. B. Shaw, *op. cit.*, p. 11 の系図および Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien.” *Der Islamische Orient. Berichte und Forschungen*, Pts. 6-10, Berlin: Wolf Peiser Verlag, 1905, p. 340 の系図を参照。

124) この一文の意味内容は不分明である。

125) A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 22a-b; Cf. D191, fol. 26b) では「さて、その時に、イーシャーニ・カラーン猊下の息子、温和と恥じらいの鉾山、誠実と清浄の宝庫、ナキーブたちのクトブ (枢軸)、貴族たちのガウス (助け手)、すなわち、ホージャ・ムハンマド・ユースフ猊下が、神の恩寵の顕現、神の勝利の拠り所、すなわち、本来の名はホージャ・ヒダーヤト・アッラーである、息子のホージャ・アフアーク——アフアークというのはこの世界を言い、西から東まで聖者性をもって、ホージャ性をもって有名になり、すべての世界の人々が服従の帯を締めるため、ホージャ・アフアークと呼んだ——とともに二人でカシュガルに乘駕した」と記され、ホージャ・ユースフ (ホージャ・ムハンマド・ユースフ) とホージャ・アフアークの親子関係が正しく認識されている。しかし、A グループの写本では、どこからカシュガルに来たのかは記されていない。ただし、この父子はサマルカンド北郊のダフビードから直接カシュガルに来たという訳ではなかった。プローフィ氏の研究によると、ムハンマド・ユースフは旅をしてからハミに落ち着き、そこで婚姻により、カラ・ハーン王家の子孫を称するカシュガル出のサイドの家系の一員になり、長子のアフアーク・ホージャを含む三子をもうけたという。そして、ムハンマド・ユースフは1640年ごろ、息子たちとともに南へ移動してカシュガルに近い村に居を定めたという。David Brophy, “The Oirat in Eastern Turkistan and the Rise of Āfāk Khwāja,” *Archivum Eurasiae Medii Aevi*, edited by Th. T. Allsen, P. B. Golden, R. K. Kovalev, and A. P. Martinez, 16 (2008/2009), Wiesbaden: Harrasowitz Verlag, pp. 17-18 参照。

(taht-i salṭanat) にアブド・アッラー・ハーン (‘Abd Allāh Ḥān)¹²⁶⁾ が坐していた。アブド・アッラー・ハーンに三人の息子があつた。長男ヨルバルス・ハーン (Yolbars Ḥān) はカシュガルにいた。ヌール・ディーン・ハーン (Nūr Dīn Ḥān) はアクスにいた。イスマーイール・ハーン (Ismā‘īl Ḥān) は〔父アブド・アッラー・ハーン〕自身のもとにいた。しかしヨルバルス・ハーンは父の言葉に従わないで、横柄なことをしていた。ホージャ・ムハンマド・ユースフとともにホージャ・アーファークにとても敬意を表していた。

ある日、スルターン [=ヨルバルス・ハーン] は柱廊 (riwāq) から眺めていて、ある人が歩兵の一团と共に驢馬に乗って過ぎゆくのを見た。スルターンはその方が誰であるのかを尋ねた。帝王の従者たち (ta‘alluqāt) はイーシャーン・ホージャ・ムハンマド・ユースフであると言つた。スルターンは即座に金製の鞍・下鞍とともに一頭の駿馬を出させた。イーシャーン・ホージャ・ムハンマド・ユースフは驢馬から下りて馬に乗り、さらに馬から下りて驢馬に乗つた。馬にホージャ・アーファークを乗せて、【p. 24 / fol. 12b】「ホージャよ、あなた自身をどのように見えていますか」と尋ねた。ホージャ・アーファークは「自分自身を、世界征服者の帝王となったように見ている」と言つて一息ついた。それから後、帝王の姿で生涯を過ごした。

イーシャーン・ホージャ・シャーディー猯下¹²⁷⁾ もカシュガルにある、自分に〔奉納された〕地所をも¹²⁸⁾ ホージャ・ムハンマド・ユースフに委ねた¹²⁹⁾。カシュガルの人々は老いも若きも、ヨルバルス・スルターンをはじめとして皆、この方〔ホージャ・ムハンマド・ユースフ〕に修行の意思を表明し (dast-i irādat qīlip), 弟子 (murīd) となつた。

さて、運命の手はホージャ・シャーディーの襟をつかみ、<だれでもみな死を味わう> [『クルアーン』21-35] [とつように、ホージャ・シャーディーは死の杯を] 一杯また一杯と飲んだ。<「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている> [『クルアーン』2-156]。ヤルカンドの中で苦難の服喪が新たに生じたようだ。アブド・アッラー・ハーン¹³⁰⁾ を先頭と

126) モグール・ハーン国 (ヤルカンド・ハーン国) の第10代君主 (在位 1638/39 - 1667年)。このハーンの治世におけるカシュガル・ホージャ家の動向については、澤田稔「オアシスを支配した人びと——17世紀ヤルカンドの事例」松原正毅ほか (編)『ユーラシア草原からのメッセージ——遊牧研究の最前線』東京：平凡社、2005年に詳しい。

127) ホージャ・イスハーク・ワリーの二男である。本書 (p. 7 / fol. 4a; p. 20 / fol. 10b; p. 22 / fol. 11b) 参照。

128) D126 写本と Or. 5338, fol. 12a では「自分の地所をも」(özläriniñ milk zamınlarını ham) と記すが、ms. 3357, fol. 20b; Or. 9660, fol. 12a; Or. 9662, fol. 18b では「自分に奉納された地所をも」(özlärgä niyāz milk zamınlarını ham) とある。後者を採つておく。

129) D126 写本と ms. 3357, fol. 21 では tafwīz qıldılar, Or. 9660, fol. 12a では TQVYZ qıldılar, Or. 9662, fol. 18b では T‘VYZ qıldılar と綴るが、Or. 5338, fol. 12a の tafwīd qıldılar に従う。

130) A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 22b; D191, fol. 27b) では「イスマーイール・ハーン」。

して国のすべての人々が哀悼して、アルトゥン (Altun) 内に埋葬した¹³¹⁾。この方から二人のマフドゥームザーダ (maḥdūm-zāda) [マフドゥーミ・アーザムの子孫] が形見として残っていた。一人は聖者性の茂み¹³²⁾のライオン, ホージャ・ウバイド・アッラー・ホージャム (Ḥvāja ‘Ubayd Allāh Ḥōjam), もう一人はサイド性の公証人, ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム (Ḥōja ‘Abd Allāh Ḥōjam)。アブド・アッラー・ハーン¹³³⁾はこの二人のマフドゥームザーダを偉大な老師¹³⁴⁾ [ホージャ・シャーディー] の代わりと見なしていた。なぜならば, アブド・アッラー・ハーンはホージャ・シャーディー・ホージャムに帰心 (inābat)¹³⁵⁾していたからである。

かいつまんで述べると, ホージャ・ムハンマド・ユースフが [ホージャ・シャーディーの] 追悼にクルアーンの開扉の章を詠むためか, あるいはハーンが招いたためか, カシュガルからヤルカンドへお越しになった。ハーンをはじめ国のすべての人々が出迎えて, 敬意を表して [p. 25 / fol. 13a] 都市に入れた。結局, ハーンはホージャ・ムハンマド・ユースフに帰依 (irādat) するつもりになった。[そのことが]多くの人々に知れ渡った。翌日ハーンをはじめ人々がホージャ・ムハンマド・ユースフに帰心するということが決められた。これを聞いてホージャ・シャーディー・ホージャムのハリーファ達のうち何人かが集まって, 二人のマフドゥームザーダを首の上に乗せて, 一団の前でハーンに申し上げた。「世界の帝王よ, ある者の財産を別の者が所有するという事は聖法から見て正しいのですか¹³⁶⁾」。ハーンは「何事か」と尋ねた。ハリーファたちは言った。「ハーンをはじめ皆の者が我々の老師に帰心していた。我々の老師の祝福された身体が無くなっても, その靈魂は現にある。この二人の我々のマフドゥームザーダがおり, たとえ彼ら自身が未熟でも, 事は熟している。我々には幾人かのハリーファがいる。我々はたとえ卑賤な者であろうとも, 允許されている (ruḥṣat karda durmiz)。神に称賛あれ! 我々は我々の老師の礼拝用敷物を空にしないで, ホージャガーンのスィルスィラ (道統の系譜) を

131) アルトゥンはヤルカンドにあるハーン家の墓地の名である。なお, ホージャ・シャーディーことホージャ・ムハンマド・ヤフヤーは, 『シャー・マフムードの歴史』によれば, 1055年(西暦1645-46年)に逝去した(O. F. Akimushukin, *op. cit.*, Persian text, p. 70)。

132) D126写本ではFYŠHと綴られているが, ms. 3357, fol. 21a; Or. 9660, fol. 12a; Or. 9662, fol. 19aの綴り(BYŠHまたはPYŠH)に従う。

133) Aグループの写本(Turk d. 20, fol. 23a; D191, fol. 27b)では「イスマーイール・ハーン」。

134) D126写本ではPRと綴られているが, ms. 3357, fol. 21a; Or. 9660, fol. 12aの綴り(PYR)に従い, pīr (老師)と読む。

135) アキムシュキン氏によると, 15-17世紀の聖者伝文献において inābat kardan は「自分より上の人の権力を認めること」「ある人を自分の師匠と認めること」「宗教的指導を頼むこと」つまり「ムリード(弟子)になること」という特殊な意味を持っていた(O. F. Akimushukin, *op. cit.*, p. 276, note 98)。

136) D126写本では「所有することは聖法にありますか」と記すが, ms. 3357, fol. 22a; Or. 9662, fol. 19bに従った。

ふるわしている。我々は今、ハーンがイーシャーン・〔ホージャ・〕¹³⁷⁾ ムハンマド・ユースフに帰心しているらしいと聞いている。自らの導師 (muršid) から¹³⁸⁾ 顔をそむけて、別の導師に帰心する動機は何であるのか。もし証明論拠、靈感奇蹟を求めることになるならば、我々が信じる者であり、我々の訓育者 (murabbī) は神と預言者である。さもなければ、憐れんで許可を与えれば、我々のマフドゥームザーダを連れて、我々の老師の身体を持って、我々はみな立ち去るであろう」。

【p. 26 / fol. 13b】ハーンは息を止めて驚き、一時してのち、言った。「ハリーフアたちよ、今日の夜、そなたたちが祈念 (tawajjuh) し、我々が神に選択を請うならば (istiḥāra qilsaq) [それでよかろう]』と言って頭を垂れた。さらに「翌日、我々が返事をすれば [よかろう]』とやった。これらの者はハーンの前から去って、そのように祈念を始めた。イーシャーン・ムハンマド・ユースフも祈念をしていた。特にウシュトゥル・ハリーフアの息子アブド・アルアズィーズ・ハリーフア (‘Abd al-‘Azīz Ḥalīfa) は発情した¹³⁹⁾ 駱駝 (uštūr) のように神に熱中していた。彼らを熱情に駆り立てた人は彼であった。

さてその夜、ハーン¹⁴⁰⁾ は次のような夢を見た。城市の外から一頭の雄駱駝 (bogra) が城市に入ってきた。アルトゥンから一頭の小さい駱駝 (tivā) が出てきて、雄駱駝と出会って、とうとう [小さな] 駱駝が雄駱駝をとらえた。ハーンは目覚めて、事が変わったのを知った。

翌日イーシャーン・ホージャ・ムハンマド・ユースフはハーンに会見せず、カシュガルへ向かった。一日行程進んだ所で発病した。翌朝イェンギ・ヒサールのトゥフルク (Tūflūq) という地で儂き世から永遠なる世へ旅立った。<「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている> 『『クルアーン』 2-156]。ホージャ・アーファーク・アズィーズが聞き知って、カシュガルからやってきて、その祝福された遺体を持って行って、ヤグドゥ (Yāgdū) の地に埋葬した。カシュガルの人々は叫び声をあげ、嘆き悲しみの声を天に達せしめた¹⁴¹⁾。

さて、ヤルカンド内でマフドゥームザーダたちの弘布¹⁴²⁾ は盛んになった。帰心する者たち

137) D126 写本と Or. 5338, fol. 12b では Īṣān Muḥammad Yūsuf, ms. 3357, fol. 22a; Or. 9660, fol.

12b; Or. 9662, fol. 18b-20a では Īṣān Ḥōja/ Ḥvāja Muḥammad Yūsuf. 後者により「ホージャ」を補う。

138) D126 写本では MRŠDYŪN と綴られているが、ms. 3357, fol. 22a の綴り (MRŠDYDYŪN) に従う。

139) D126 写本では MYT と綴られており、「死んだ」(mayyit) と読めるが、ms. 3357, fol. 22b; Or. 5338, fol. 13a; Or. 9662, fol. 20a の綴り (MST) に従い、「発情した」(mast) と読む。

140) A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 23b; D191, fol. 28b) では「イスマーイール・ハーン」。

141) ホージャ・シャーディーの逝去からホージャ・ムハンマド・ユースフの逝去にいたる出来事については、前掲の澤田稔「オアシスを支配した人びと——17世紀ヤルカンドの事例」304-310頁に詳しい。なお、当時ヤルカンドを治めていたのは、アブド・アッラー・ハーンであり、Aグループの写本がイスマーイール・ハーンの名を挙げているのは誤りである。

142) D126 写本では RVJ と綴られているが、ms. 3357, fol. 23a; Or. 5338, fol. 13b; Or. 9660, fol. 13a; Or. 9662, fol. 20b の綴り (RVAJ) に従い、rawāj と読む。

の信仰は強固になった。帰依しなかった者たちが帰依し始めた。【p. 27 / fol. 14a】 アブド・アッラー・ハーンが兩聖都〔マッカとマディーナ〕へ行く意図をもち出発した。統治の王座 (taḥt-i salṭanat) はイスマーイール・ハーンに委ねられた。イスマーイール・ハーンはイーシャー・ホージャ・アーファークをカシュガルから追い出して、息子のバーバーク・スルターン (Bābāq Sulṭān) をカシュガルの王座 (taḥt) に坐らせて、彼自身はヤルカンドの統治の王座に確乎となった。これらの城市は如何なるハーンの時にもこれほどの繁栄はなかったほどに繁栄した。十二年間庶民 (fuqarā ḥalq) はこの国 (yurtlar) に軍隊がいるのかいないのか知らなかった。ムスタファー〔預言者ムハンマド〕の聖法 (シャリーア) が盛んになった。ウラマーや学者たちが盛んになった。

さて、マフドゥームザーダのホージャ・アブド・アッラー・ホージャム¹⁴³⁾ が永遠なる世へ旅立った。ホージャ・ウバイド・アッラー¹⁴⁴⁾ が教導権 (ṣāhib-irṣādliq) をもち、時を過ごしていた。ある日、イスマーイール・ハーンは柱廊 (riwāq) の上部に坐っていた。ウラマーたちの一団が宮廷 (orda) の方に来ている。ハーンは即座に (dar maḥall) 立ち上がり、清浄を行って二度 (ラクア) 感謝の礼拝を遂行し、祈祷 (munājāt) に口を開いて言った。「おお神よ、この罪ある黒い顔の私めにこのような名誉を与えて下さるとは。このような知識のある賢き人々が、求めもせず指示もしないのに、私の家にお越しになるとは」と言って、感謝の賛美を済ませて、ウラマー達に面会を許して、口実をもうけて甚だ歓待した。全てのウラマー達の心は開かれ喜んだ。このようにして数年、時を過ごした。ホージャ・ウバイド・アッラー・ホージャム¹⁴⁵⁾ は人々を救済に導いていた。しかしその年齢が【p. 28 / fol. 14b】四十に達しないまま、勝利に満ちた靈魂が天国の巢へ飛んで行った。＜「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている＞〔『クルアーン』2-156〕。この方からも二人のマフドゥームザーダが形見に残った。一人は高貴さの薔薇園の咲き誇る薔薇の蕾、ホージャ・シュアイブ・ホージャム¹⁴⁵⁾ であり、もう一人は優美さの会合の公証人、すなわちダーニヤール・ホージャム¹⁴⁵⁾ である。この二人のマフドゥームザーダに、イスマーイール・ハーンをはじめ全ての人々は尊敬の念を増して、暫くのあいだ生涯を過ごさせた。

〔以下、日本語訳注（2）に続く〕

143) Or. 9662, fol. 21a では「ホージャ・ウバイド・アッラー・ホージャム」。A グループ写本の Turk d. 20, fol. 24b では「ホージャ・ウバイド・アッラー・アズィーズ¹⁴⁵⁾ 下は小さい時に逝去していた」と記す。

144) Or. 9662, fol. 21a では「ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム」。

145) Or. 9662, fol. 21b では「ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム¹⁴⁵⁾ 下」。A グループの写本の Turk d. 20, fol. 24b でも「ホージャ・アブド・アッラー」。